

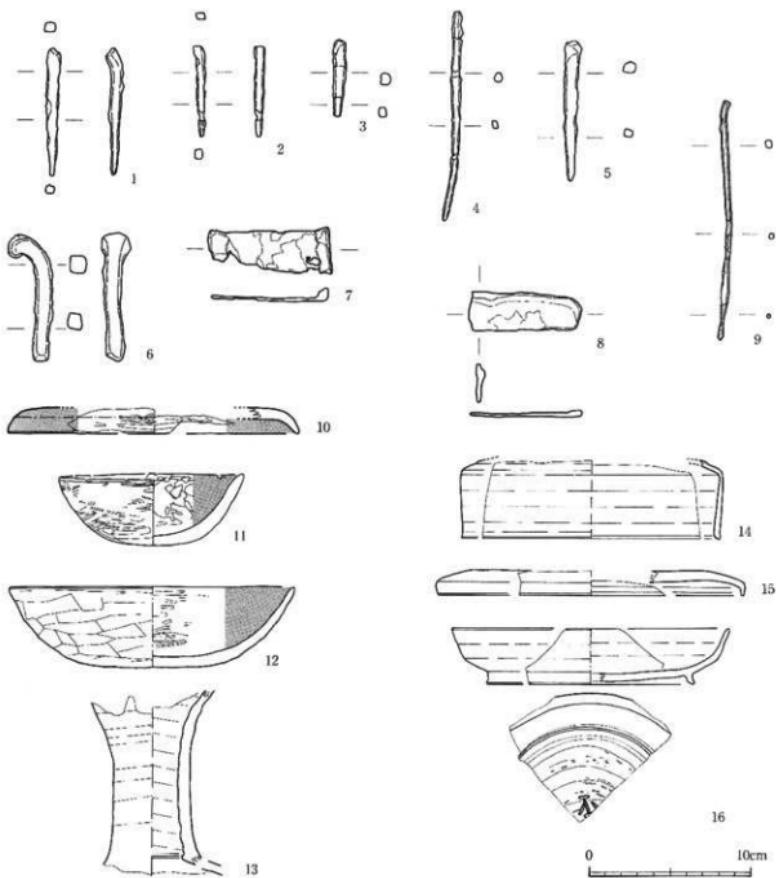
第142図 南方官衛東地区周辺遺構配置図 () 内は検査次数

SH1303豎穴住居跡（第65次・第140、142、144回）

東西5.2m、南北5.1mの隅丸方形で、東壁の方向はN-5°-Eである。壁は直立気味に立ち上がり、高さは40cm残存している。床面はにぶい黄褐色シルト質粘土による貼床で、南側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で直径30~50cm、深さ50~60cmの円形のピットを2個検出した。配置から主柱穴と考えられるが、柱痕跡は検出できなかった。

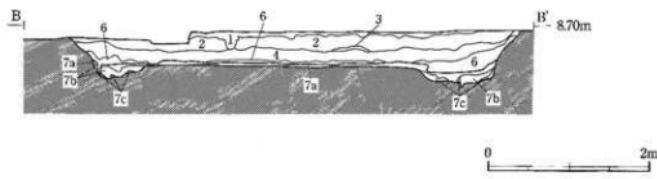
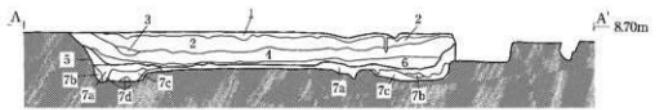
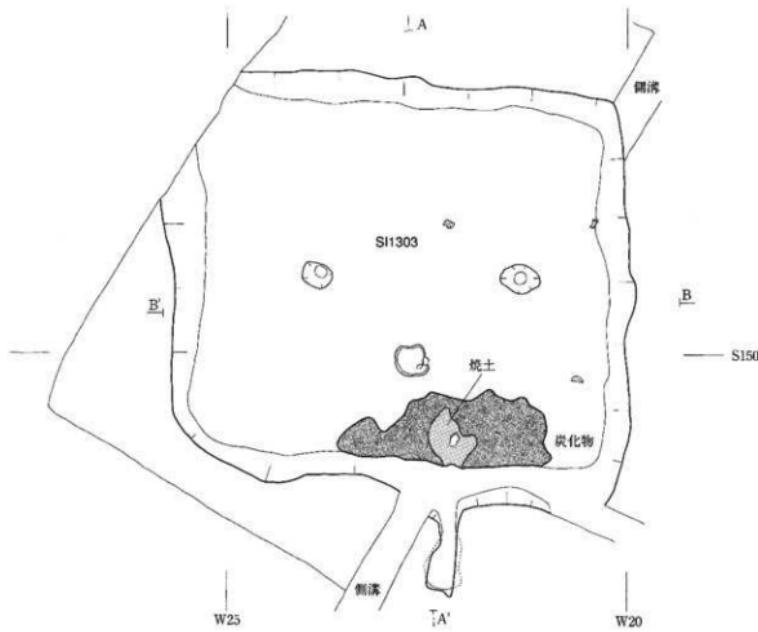
カマドは南壁東寄りにあり、天井部やソデの部分が擾乱を受け煙道のみ検出された。煙道は長さ160cm、上幅25~35cmである。カマド前面の箇所に焼土ならびに炭化物が堆積している。

遺物は住居跡床面近くの堆積土中から体部に段や縫を持たない土師器<中>C-114・115壺(第143図11、12)、両面黒色処理されたC-118蓋(第143図10)、内面にカエリのない須恵器<中>E-83・87蓋(第143図14、15)などが出土している。また堆積土の上層からは底部に「金」もしくは「半」とヘラ書きされた須恵器<中>E-84高台付壺(第143図16)や、釘などの鉄製品が出土している。またこの他に掘り方埋土中から頸部のみの須恵器<中>E-86長頸壺(第143図13)も出土している。



图版 番号	登錄 番号	特徴	器形	出土地点	法量 (cm)	外面觀	内部觀	備考	調査 次數	写真 番組
1	S1303-1	骨製品	針	SI1303	2 長3.80±1 橫0.9 厚3~0.9				65	
2	S1303-2	骨製品	針	SI1303	2 長3.65±0.2 橫0.7 厚2~0.7				65	
3	S1303-3	骨製品	針	SI1303	2 長3.62±0.2 橫0.7 厚2~0.7				65	
4	S1303-4	骨製品	針	SI1303	2 長3.10±0.03~0.06 厚0.5~0.5				65	
5	S1303-5	骨製品	針	SI1303	2 長3.58±0.03~0.11 厚0.5~0.8				65	
6	S1303-6	骨製品	針	SI1303	2 長3.80±0.08~0.18 厚0.5~0.9				65	
7	S1303-7	骨製品	不明	SI1303	2 橫2.8~2.8 橫0.4				65	
8	S1303-8	骨製品	不明	SI1303	2 橫2.0~2.4 橫0.8				65	
9	S1303-9	骨製品	針	SI1303	2 長3.18±0.02~0.05 厚0.2~0.4				65	
10	C114	十脚器	蓋	SI1303	4 細径高1.6 口徑17.0	体部へラミガキ、縫合部黑色處理			65	
11	C114	上脚器	身	SI1303	4 細径4.5 口徑11.5 底径5.5	ヘラケツリ→ラミガキ			AN2a	65
12	C115	十脚器	身	SI1303	4 細径5.0 口徑17.7 底径9.9	口縫部ヘラケツリ、体部ヘラケツリ			AN1a	65
13	E-86	單脚器	身	SI1303	9 細径内11.5	口縫部ヘラケツリナメ				65
14	E-83	單脚器	蓋	SI1303	4 細径高4.8 口徑16.0	ロクロナメ			B3	65
15	E-87	單脚器	蓋	SI1303	2, 4 細径高1.5 口徑19.0	表面ロクロナメ、体部内輪ヘラケツリ			II	65
16	E-84	單脚器	身	SI1303	2 細径3.5 口径17.2 底径12.8	口縫部・体部ロクロナメ、底端部ヘラケツリ			11	65

第143図 SI1303 出土遺物



層位	土色	土性	構造
1	H0YR3/2 黑褐色	シルト	火山灰を含む
2	H0YR4/2 灰青褐色	粘土質シルト	火山灰を多量に含む
3	H0YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	火山灰と粘土を多量に含む
4	H0YR3/3 赭褐色	シルト質粘土	火山灰と粘土を微量に含む
5	H0YR4/4 雜色	シルト	
6	H0YR2/3 黑褐色	シルト質粘土	火山灰を少量化
7a	H0YR5/4 にふく黄褐色	シルト質粘土	火山灰を多量含む
7b	H0YR5/2 灰青褐色	シルト質粘土	火山灰を微量に含む
7c	H0YR5/3 にふく黄褐色	シルト質粘土	火山灰を微量に含む
7d	H0YR6/2 灰青褐色	シルト質粘土	

第144図 SI1303 平・断面図

3. 寺院西方建物群

方四町II期官衙の南西で、郡山庵寺の北西に位置している。南を木材列(塀)で区画され、その北に掘立柱建物跡が配置されている。建物跡の全容が明らかな遺構には、総柱建物跡が多い。方四町II期官衙の内部でも総柱の建物跡はきわめて稀で、しかも一箇所に集中するような地点は今のところ発見されていない。II期官衙全城でも、この地区のみ複数棟の総柱あるいは束柱のある建物が検出されている。

SB1370建物跡 (第96次・第146図)

桁行7間、総長15m(柱間寸法220cm)、梁行2間、総長5.2m(柱間寸法260cm)の東西棟の建物跡で、方向は梁行(西柱列)でN-2°-W、桁行(南柱列)でE-3°-Nである。柱穴は一辺50~110cmの隅丸方形で、深さは30~50cmである。柱痕跡は直径15~30cmである。内部の柱は、柱穴や柱痕跡とも小規模なものが多く、柱筋も梁列ではほぼ描っているものの、桁列では不揃いとなっている。よって内部の柱は、束柱であると考えられる。S1E5のみ抜き取り穴が検出されている。

遺物は柱穴掘り方より、土師器壺、甕片、須恵器甕片が出土している。

SD1367・1372溝跡、SA272・1380木材列、SB1390・1395建物跡を切り、SD1381溝跡に切られている。

SB1375建物跡 (第96次・第146図)

南北1間以上、総長2.8m以上(柱間寸法280cm)で、建物跡の西南隅と考えられ、柱列の方向はN-0°-E(真北方向)である。柱穴は一辺50~110cmの隅丸長方形で、深さは40~50cmである。柱痕跡は直径28~40cmである。調査区北壁際で落込みを検出しているが、柱間寸法から別遺構の一部と考えられる。

遺物はS2柱穴掘り方より、土師器甕片が1点出土している。

SD1367溝跡に切られている。

SB1390建物跡 (第96次・第146図)

東西2間、総長3.8m(柱間寸法185~190cm)、南北2間、総長3.8m(柱間寸法180~195cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-E、南柱列でE-2°-Sである。柱穴は一辺50~75cmの隅丸方形で、深さは30~40cmである。柱痕跡は直径20~30cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。

SD1372溝跡を切り、SB1370建物跡に切られている。

SB1395建物跡 (第96次・第146図)

東西2間、総長4m(柱間寸法200cm)、南北2間、総長4.4m(柱間寸法210~220cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-W、南柱列でE-2°-Nである。柱穴は一辺50~90cmの隅丸方形で、深さは50cm程である。柱痕跡は直径20~25cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。調査区の制約から確認できなかったが、南北の規模が2間以上になる可能性が残されている。

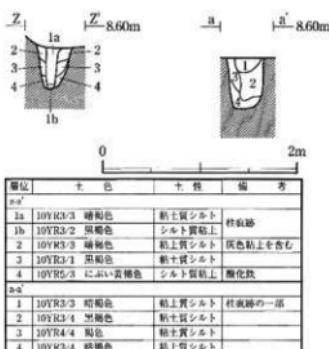
SD1367・1369溝跡、SA1380木材列を切り、SB1370建物跡に切られている。

SA1365木材列 (第96次・第146図)

直径5~25cm程の丸材をE-2°-N方向に立て並べている。掘り方は上幅15~35cmで、深さは残存状況の良好な箇所で45~50cm、調査区西半では削平され途切れている。

遺物は掘り方より土師器壺、甕、須恵器甕片が少量出土している。

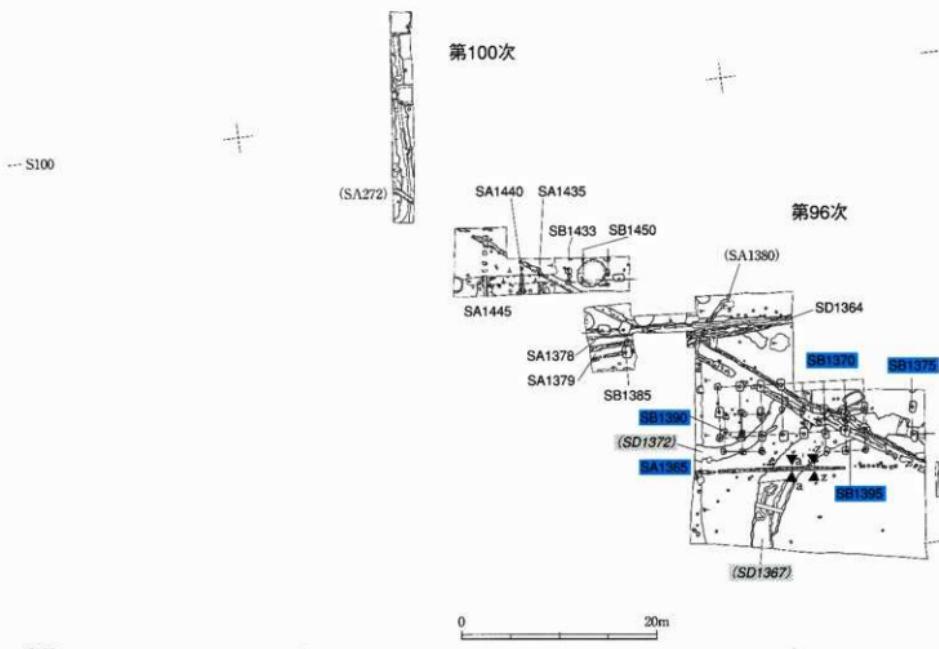
SD1367溝跡、SA272・1380木材列を切り、SD1381溝跡に切られている。



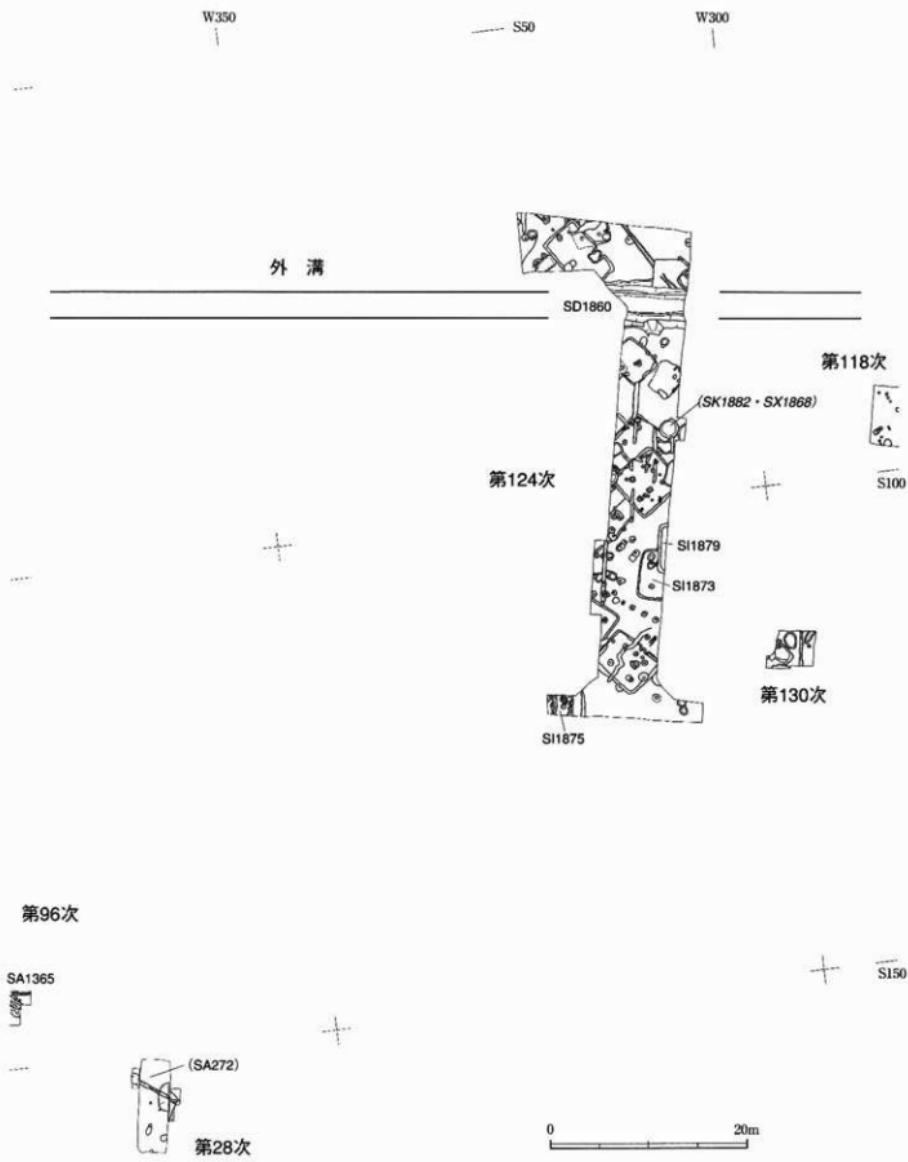
第145図 SA1365 断面図



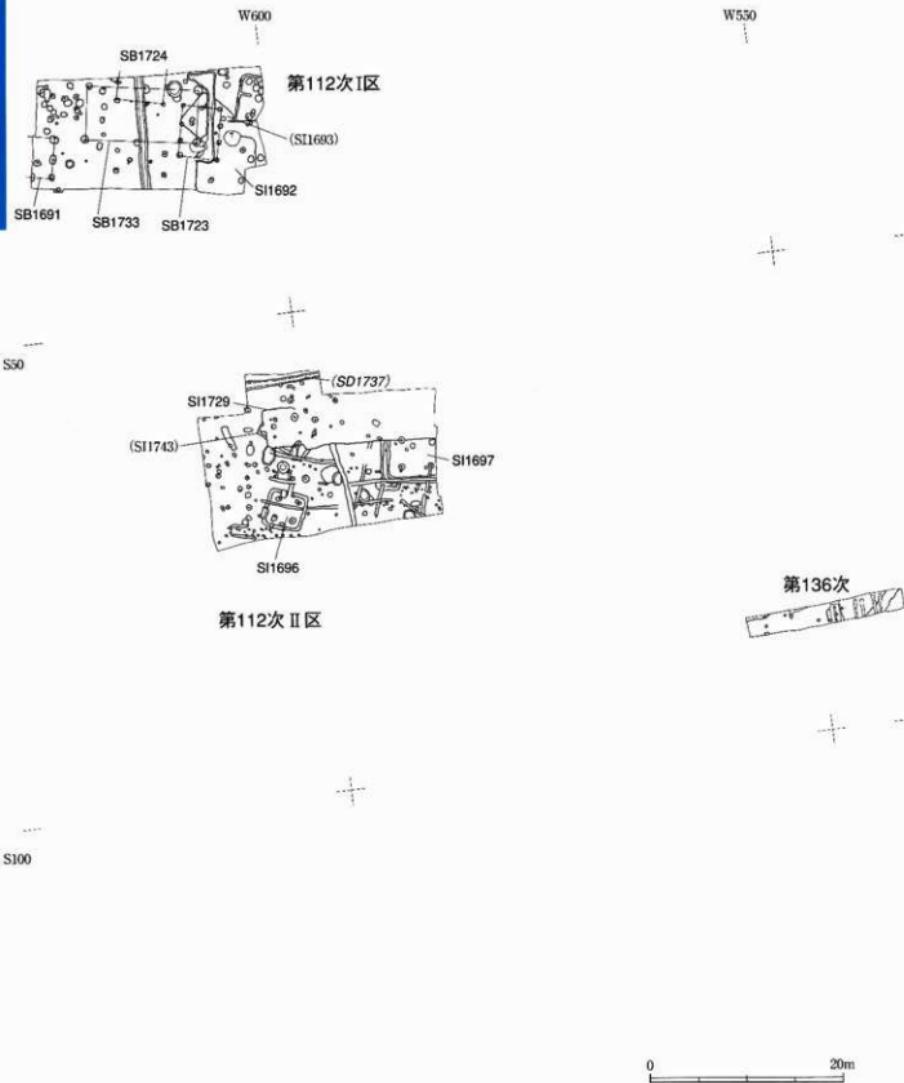
第123次



第146図 II期宮術南方1



第147図 II 期官衙南方 2



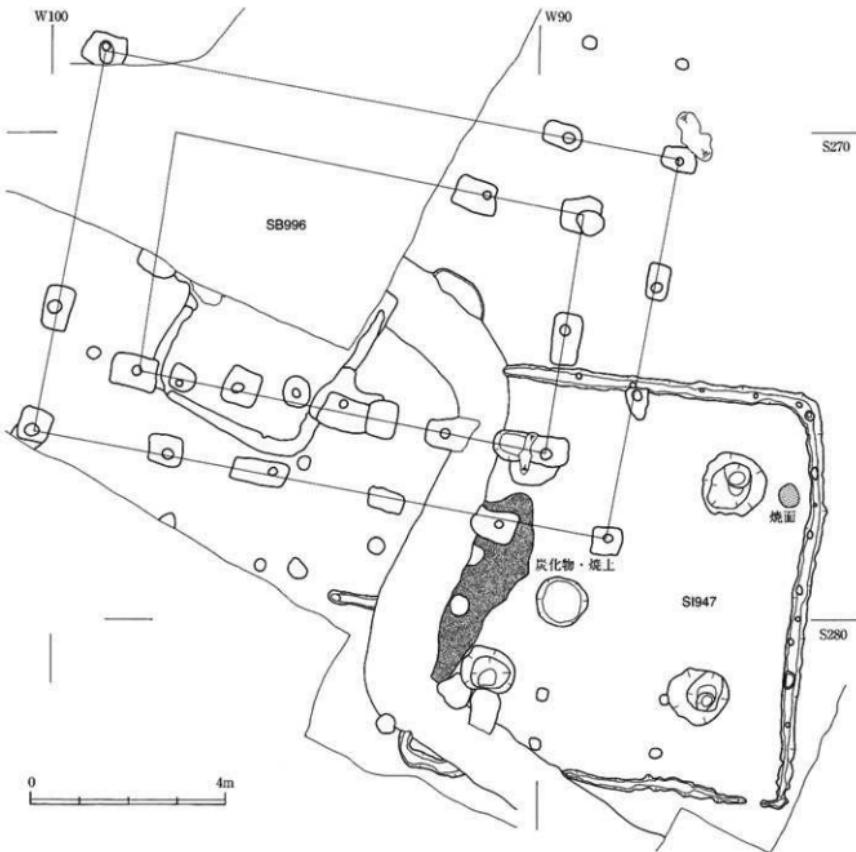
第148図 Ⅱ期官衙西方1

4. 寺院東方建物群

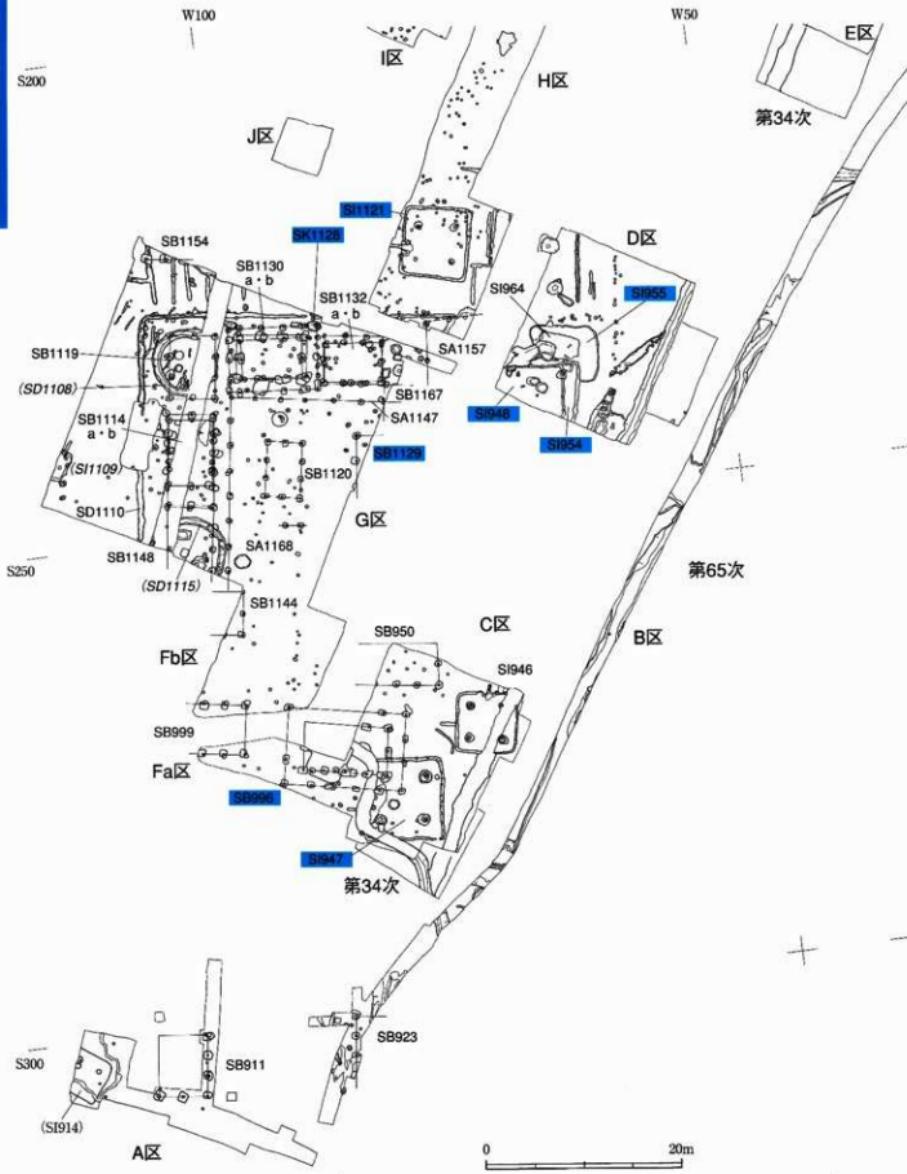
郡山廃寺の東に位置し、16棟ほどの掘立柱建物跡が検出され、3時期の変遷が確認されている。建物の中にはSB1130建物跡やSB996建物跡のように、規模は小さいながら四面廂付建物跡が含まれ、最終時期の遺構群にはSA1147一本柱列による軒跡が伴っている。第65次調査については、正式報告が刊行されているので、記載を省略すべきところではあるが、遺跡全体の年代的な検討の上で重要な遺構、遺物が含まれているので、一部ではあるが掲載する。

SB996建物跡（第65次・第149、150図）

桁行5間、総長12m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均215cm、廂部分柱間寸法220～300cm、平均246cm）、梁行3間、総長8m（身舎部分柱間寸法220～260cm、平均240cm、廂部分柱間寸法220～280cm、平均260cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺60～110cmの隅丸長方形のものが多く、柱



第149図 SB996、SI947 平面図



痕跡は身舎で直径15~26cm、廂で直径14~28cmである。柱穴の深さは、身舎で35~60cmで、廂で30~70cmである。N3E1柱穴の柱痕跡下部の材が残存していた。身舎のN1E1のみに抜き取り穴が見られる。

遺物は掘り方中より土師器坏、甕片や、須恵器坏、甕片が出上している。

SI947・1101堅穴住居跡を切り、SD931溝跡に切られている。

SI947堅穴住居跡 (第65次・第149、150図)

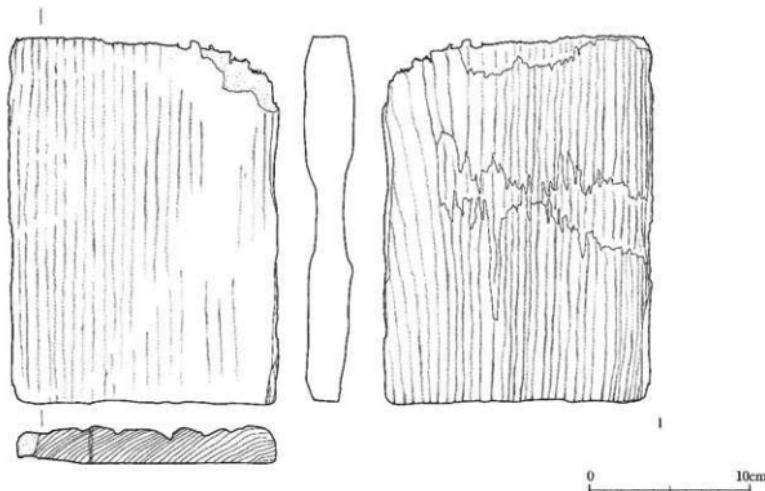
東西8.2m、南北8.6mの隅丸方形で、東壁の方向はN-2°-Wである。壁は垂直気味に立ち上がるところと緩やかに立ち上がるところがあり、高さは15~30cm残存している。床面は褐色灰色粘土による貼床で、西側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で5つのピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1~P4が主柱穴と考えられた。P1、P3からは底面より礎板状に板材が重なり合って出土した。各々の板材は脆弱であったが、P3から出土した板材(第151図1)は、埋設時の形態を明瞭に残していた。

カマドは西壁中に位置したと推定されるが、SD931溝跡に切られ煙道のみ検出された。煙道は残存長100cm、上幅22~27cm、下幅12~16cmで、明瞭ではないが先端がやや凹んでいる。

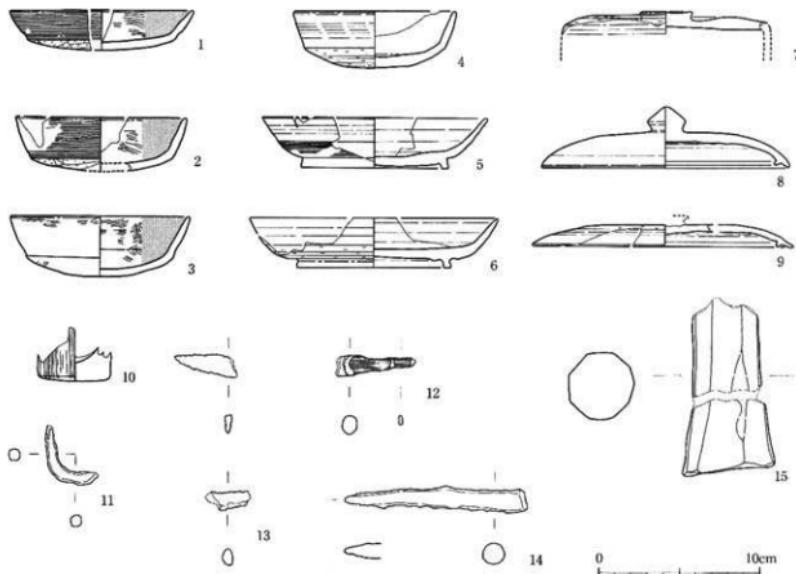
周溝は上幅15~40cm、下幅4~21cm、床面からの深さは7~12cmで、断面形はほぼU字形である。周溝内よりピットを14箇所で検出した。

遺物は住居跡床面から体部の下端に段のある土師器<中>C-8坏(第152図2)、丸底の須恵器<中>E-1坏(第152図4)、器高があまりなく体部が外傾する<中>E-17高台付坏(第152図5)、器高が比較的高いと推定される<中>E-77蓋(第152図7)、天井部が平らな<中>E-19蓋(第152図8)、天井部がさらには低くなる<中>E-18蓋(第152図9)、残欠の鉄製品<中>N-26・27不明品(第152図11、13)などが出土している。またP1から鉄製品<中>N-15刀子(第152図12)、P3から土製品<中>P-9(第152図15)、周溝内から比較的扁平な土師器<中>C-3坏(第152図1)が出上している。その他堆積土中から土師器<中>C-33坏(第152図3)、須恵器<中>E-78高台付坏(第152図6)、土製品<中>P-10不明品(第152図10)、鉄製品<中>N-24不明品(第152図14)などが出土している。

SD931溝跡、SB997建物跡に切られている。



第151図 SI947 出土遺物 (1)



国際 番号	年号 番号	種別	器形	出土箇点	法長 (cm)	外面測定	内面測定	備考	調査 次数	写真 回数
SI947 (1)		木製品	板材	SB947	P2	貝 S227 厚 5.18~3.2			65	
SI947 (2)		中石	十脚器	环	SB947・壁付	壁付+口付 11.4 壁厚 9.2	口部部・体部カコナナ、先端ハラケズリ	ハラミガキ 黒色処理	A 8.3	65
2	中石	上脚器	环	SB947	床面	貝 S235 厚 10.87 壁厚 9.8	口邊部・体部カコナナ、底部ハラケズリ	ハラミガキ 黑色処理	A 8.3	65
3	中石	十脚器	环	SB947	壁付	貝 S238 口付 10.2 壁厚 9.2	白端部ハラミガキ、体部・底部ハラ	ハラミガキ 黑色処理	A 8.3	65
4	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S235 口付 10.2 壁厚 9.8	口邊部・壁部ヨロナナ、底部ハラケズリ	不明	1.1a	
5	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S233 口付 14.0 壁厚 9.2	口邊部・壁部ヨロナナ・ハラケズリ	ロクロナナ	1.1	65
6	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S232 口付 14.0 壁厚 9.6	口邊部・壁部ヨロナナ・ハラケズリ	ロクロナナ	1.1	65
7	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S234 口付 13.0 壁厚 9.6	つま先ヨロナナ・ハラケズリ	ロクロナナ	65	
8	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S238 口付 15.4	ロクロナナ	ロクロナナ	1.2a	65
9	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S235 口付 16.3	海綿ヨロナナ・天井部凹版ヘラケズリ	ロクロナナ	1.2	65
10	中石	十脚器	环	SB947	床面	貝 S231 口付 14.5	体部ハラメ、底部ヨロナナ	指ナナ	65	
11	中石	全葉器	不明	SB947	床面	貝 S235 厚 9.0~9.75			65	
12	中石	全葉器	万子	SB947	P1	貝 S235・壁付 11.4 壁厚 9.8			65	
13	中石	全葉器	不明	SB947	床下	貝 S235 厚 9.25以上 壁厚 7.1			65	
14	中石	全葉器	不明	SB947	床下	貝 S234 厚 1.5			65	
15	中石	全葉器	不明	SB947	P2	貝 S233.1 壁厚 4.5~5.5	ハラケズリ		65	

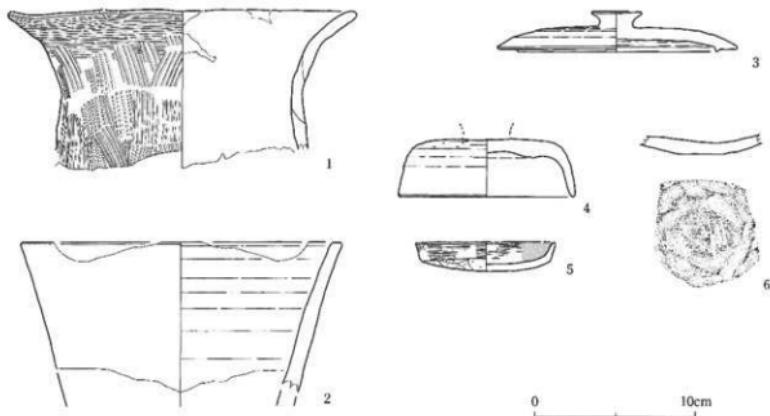
第152図 国 SI947 出土遺物 (2)

SI948堅穴住居跡 (第65次・第150、155回)

東西6.1m、南北5.15m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN—E—Wである。壁は垂直に立ち上がり、高さ20~25cm残存している。床面は灰黒褐色粘土質シルトと黒褐色粘土による貼床で、P1の西側に80×135cmの範囲で、高さ6cmのマウンド状の高まりがある。床面上で10個のビットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

カマドは北壁中に天井部やソデが崩壊した痕跡のみを検出した。これらを撤去した床面上で83×45cmの不整形で、深さ5cm程のビットを検出した。

周溝は北壁の一部と東壁に認められ、幅14~25cm、深さ3~6cmで、断面形はU字形である。周溝内よりビッ



回数 番号	器種 番号	種別	断面形状	出土地點 附位	証量 (cm)	外側調査	内面調査	参考	測定 次元	考文 問題
1	平C-37 上部蓋	蓋	SI948	床面	残存高8.75 口徑1.6	口縁部ノカゲ、底部ハテメ	口縁部・体部不明	A 1	65	
2	中E-37 底付蓋	蓋	SI948	P1	残存高10.2 口徑20.0	口縁部・体部小明	口縁部・体部ノカゲ	1	65	
3	中K-9 須恵器	蓋	SI948	P1	残高25 口徑14.9	縦溝・つまむけ付、口縁部ノカゲ	口縁部ノカゲ	12b	65	
4	中L-9 須恵器	蓋	SI948	蓋4片	残存高13.3 口徑10.3	須恵器ノカゲ、天井部横輪ヘラケズリ	ロクロナガ	B 2	65	
5	中C-4 土師器	壺	SI948	壺4個	残高28.11口径5.6 底径5.0	口縁部ノカゲ、底部ノカゲ	ハラミガキ、單色處理	A B 3	65	
6	中C-8 土師器	壺	SI948	壺4個	残存高12.4 口徑3.0	底部ヘラケズリ、底部本無釉	ハラミガキ、單色處理		65	

第153図 SI948 出土遺物

トを6箇所で検出した。

遺物は住居跡床面からハケメ調整の顯著な土師器<中>C-37蓋(第153図1)、堆積土中からはきわめて小型の土師器<中>C-4壺(第153図5)、底部に木葉痕の残るC-89壺(第153図6)、掘り方埋土中からは器高が高い須恵器<中>E-79蓋(第153図4)、P1からカエリがありきわめて扁平な須恵器<中>E-9蓋(第153図3)、口縁部がラッパ状に開くE-81壺(第153図2)が出土している。

SI954・955竪穴住居跡を切っている。

SI954竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西7.3m以上、南北5.9m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN-4°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、高さは残存状況の良好な箇所で20cm程である。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床である。床面上で2個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が柱穴と考えられた。

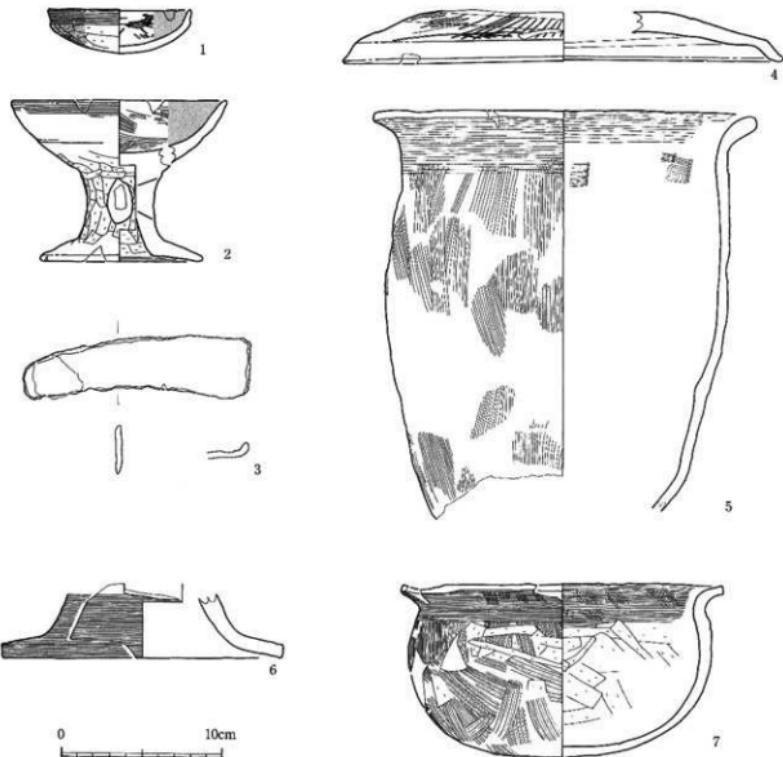
周溝は幅21~30cm、深さ10~11cmで、断面形はU字形である。北壁の西半で途切れている。

遺物は住居跡床面から脚部に窓を有する土師器<中>C-18高壺(第154図2)、基部がL字に折れ曲がった鉄製品<中>N-9鎌(第154図3)、堆積土中からはハケメ調整の土師器<中>C-94壺(第154図5)、P2からは両面黒色処理され、小振りの土師器<中>C-15壺(第154図1)、天井部に櫛描き状の沈線が多数入る須恵器<中>E-82蓋(第154図4)が出土している。

SI955竪穴住居跡を切り、SI948竪穴住居跡に切られている。

SI955竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.56m、南北5.7mの隅丸方形で、南北軸の方向はN-0°-Eである。壁は緩やかに立ち上がり、高さは5~20cm残存している。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床で、張替えを伴う造り替えがあると考えられる。



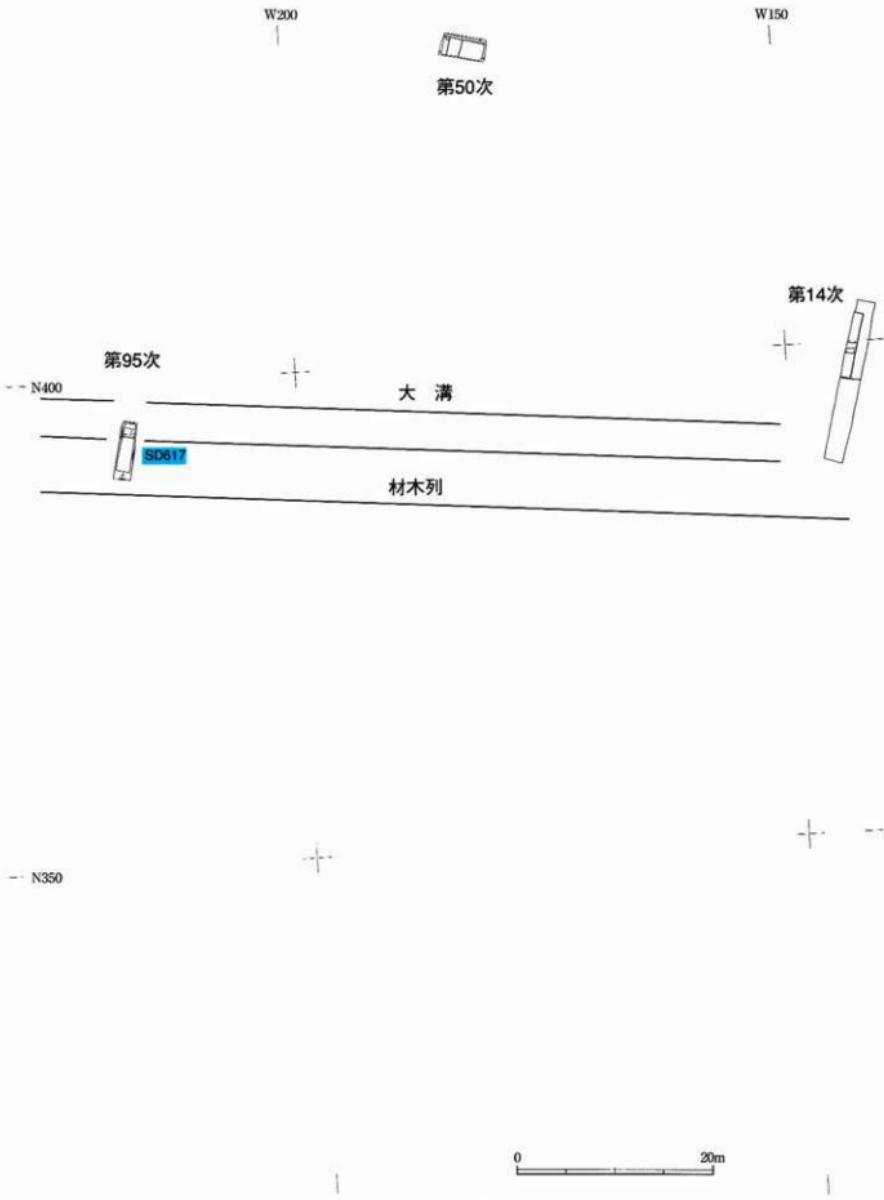
遺物 番号	形状 番号	種類	器形	出土場所	法長 (cm)	外観調査	内部調査	備考	西高 東低	西高 東低
1 HIC-15	土師器	輪环	筒	西土造地 層位	器高5.6 口径8.8 底径8.7	口縁コロナデ、底部・側面ラテツリ突出部 LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	A II b	65	65
2 HIC-16	土師器	輪环	筒	床面 層位	器高10.0 LJ厚1.13 周径10.1	LJ縫合部コロナデ、底部・側面ラテツリ突出部 LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	LJ縫合部コロナデ、底部・側面ラテツリ突出部 LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	I	65	65
3 HIC-17	土師器	輪环	筒	床面 層位	長5.143				65	65
4 HIC-42	土師器	輪环	筒	窓内3.10	口径27.0	底部コロナデ、底部側面ラテツリ突出部 LJ縫合部コロナデ、底部ヘラナデ	ロクロナデ	E II	65	65
5 HIC-44	土師器	輪环	筒	窓内上 層位	窓芯高25.7 LJ厚23.6	LJ縫合部コロナデ、底部ヘラナデ	LJ縫合部コロナデ、底部ヘラナデ	A I b	65	65
6 HIC-38	土師器	輪环	筒	窓内4.0	底径17.4	側面ラテツリ	側面一部ヘラナデ	II	65	65
7 HIC-39	土師器	輪环	筒	窓内7.0	口径20.0	LJ縫合部コロナデ、底部・側面ラテツリ LJ縫合部→底部ヘラナデ	LJ縫合部ヘラナデ	III	65	65

第154図 SI954・955 出土遺物

カマドは北壁やや西よりにあり、55×75cmの範囲が深さ13cm程度で舌状に北に延びている。周辺の床面上に焼土やソデなどの痕跡が全くないことから、住居の使用された最終段階より以前の旧カマドと考えられる。

遺物は堆積土中から半球形の土師器<中>C-20甕(第154図7)、掘り方埋土中から窓の付いていた痕跡を留める土師器<中>C-35高环脚部片(第154图6)が出上している。

SI954・964堅穴住居跡に切られている。



第131図 方四町Ⅱ期官衙北辺1

W100

W50

— N400

第79次

大溝

木材列

(SI1201)

(SI1206)

第148次

(SI2084)

— N350

第30次

第1次



0

20m

第132図 方四町Ⅱ期官衙北辺2

2. 南方官衙

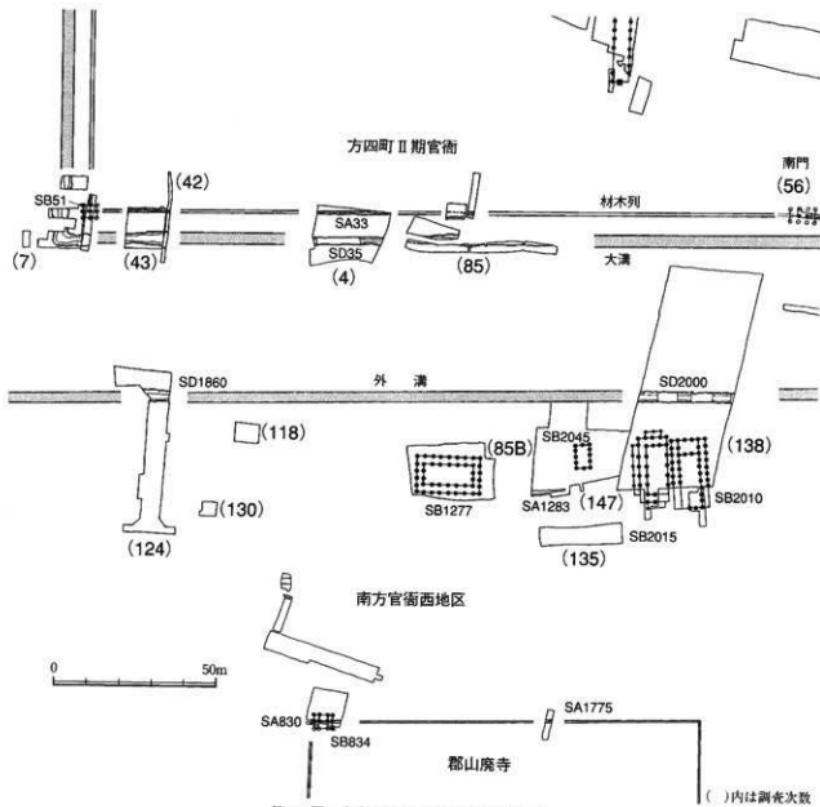
南方官衙は方四町Ⅱ期官衙の南に、正殿やその周辺的主要建物と同等か、より規模が大きい建物により構成されている。建物の北側は「外溝」としたSD2000溝跡(註14)により遮蔽されており、その南側に整然と並んでいる。便宜上、東地区と西地区に分けているが、どのようなまとまりになって機能していたかについては明らかではない。

【南方官衙西地区】

SB1277建物跡 (第85次・第133、136図)

桁行8間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法240~278cm、平均260cm、廊部分柱間寸法185~218cm、平均199cm)、梁行5間、総長11m(身舎部分柱間寸法190~225cm、平均207cm、廊部分柱間寸法227~257cm、平均240cm)の東西棟の四面庇付建物跡で、梁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺62~142cmの隅丸長方形、隅丸方形、あるいは不整形を呈する。柱痕跡は身舎で直径23~31cm、廊で直径18~31cmである。柱穴の深さは廊で14~24cmである。柱穴掘り方の埋土や柱痕跡には炭化物や焼土は含まれていない。

SB1278・1280建物跡、SA1283材木列を切っている。

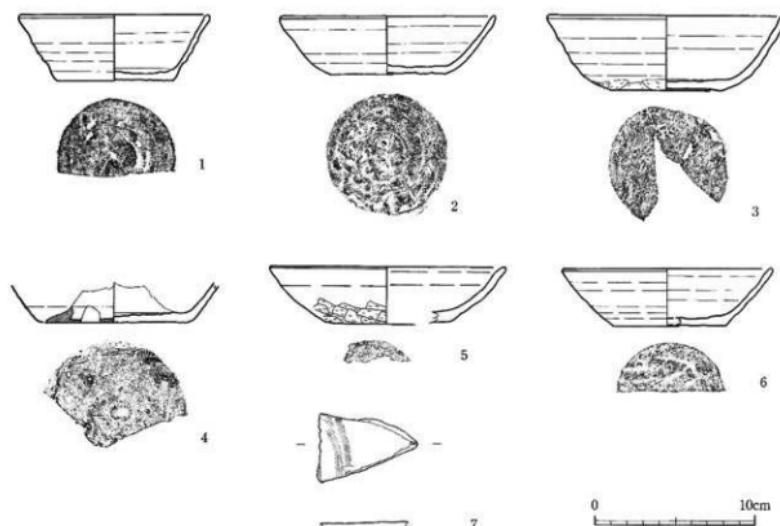


第133図 南方官衙西地区周辺遺構配置図

SB2010建物跡（第138次・第133、137図）

桁行10間、総長21m（身舎部分柱間寸法200～220cm、平均210cm）、梁行5間、総長10.8m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均220cm、廂部部分柱間寸法200～220cm）の南北棟で、東西に扉を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN-3°-Wである。身舎の柱穴は一辺85～120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径25～38cmの円形または梢円形である。身舎は北から2間のところで仕切られている。柱穴掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に比べてやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取り、あるいは切り取りを受けており、柱下部が地中に残ったもの（N10E2柱穴）もある。

遺物は掘り方中では、N7E1から器種は不明であるが外面に二条の墨痕のある土師器C-916底部片（第134図7、写真図版772）、N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN-110釘（写真図版772）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N-109（写真図版772）が出土している。抜き取り穴ではN5E2から高さ6.5cm以上の円面鏡、N6E1からは底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-456环（第134図1）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N-108（写真図版772）、N9E2からは回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E-458环（第134図4）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E-466蓋の破片（写真図版772）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK-253鉛石（写真図版772）が出土している。このほかN11E2の抜き取り穴からは、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラ



図版番号	登録番号	種類	器形	出土地点 地上遺構・層位	法量 (cm)	外面調査	内面調査	備考	調査次数	写真図版
1	E-456	須恵器	环	S2010W16 第134次	径56.1 口徑13.0 底径7.4	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1b	138	772
2	E-457	須恵器	环	S2010W16 第134次	径53.6 口徑13.6 底径7.2	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1b	138	772
3	E-451	須恵器	环	S2010W16 第134次	径49.4 口徑15.0 底径7.0	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1b	138	772
4	E-458	須恵器	环	S2010W16 第134次	径49.2 口徑13.2 底径6.6	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1	138	772
5	K-453	須恵器	环	S2010W16 第134次	径43.6 口徑14.7 底径7.8	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1b	138	772
6	E-452	須恵器	环	S2010W16 第134次	径43.6 口徑13.1 底径7.0	口縁部・体部 ロクロナデ	口縁部・体部 ロクロナデ	B1b	138	772
7	C-916	土器	环	S2010W16 第134次	径5.5	二条の墨痕あり	黑色地	A	138	772

第134図 SB2010 出土遺物

ケズリがされた須恵器E-452・467壺(第134図6、2)、底部に手持ちヘラケズリのみが観察される須恵器E-453壺(第134図5)などの多くの遺物が出土している。

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015建物跡(第138次・第133、137図)

桁行7間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法280~310cm、平均298cm、廂部分柱間寸法230cm)、梁行4間、総長8.8m(身舎部分柱間寸法200~225cm、平均215cm、廂部分柱間寸法225cm)の南北棟で、南、北、西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN=1°-Wである。身舎の柱穴は一辺83~140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径20~40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60~123cmの長方形で、柱板痕跡は直径20~36cmの円形または楕円形である。各柱穴の掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に比べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、西桁行の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡の中には、木質部が残っているもの(N2E5、N3E5、N5E5柱穴)がある。さらに廂のある建物の南、北、西側には、掘り方が直径27~40cm程の円形で、直径10~14cmの柱痕跡が伴う柱穴が取り付いている。

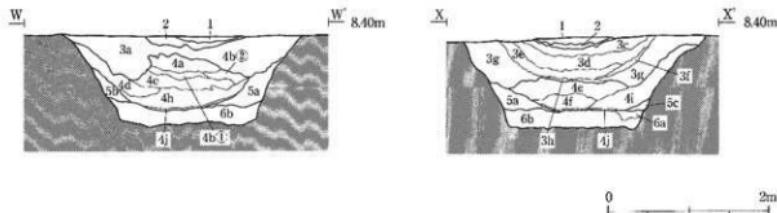
遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られている。

SD2000溝跡(第138次・第133、137図)

上幅300~340cm、底面幅160~170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査のSD984溝跡や第124次調査のSD1860溝跡と連続する遺構である。方向はE=0°-S(真東西)で、第65次調査から第124次調査で検出した箇所まで360m程である。方四町II期官街の外郭大溝と心々で48~50m離れて平行している。堆積土中の第2層は灰白色火山灰である。

遺物は第138次調査区内の第1層中より底部に回転系切り痕跡が観察される土師器壺、鉄滓、鉄片、第3層中よ



遺構名	位置	土 色	土 性	備 考	遺構名	位置	土 色	土 性	備 考
SD2000	1	10YTR4/2 灰黃褐色	粘土		1b	2.5Y7/2 灰黃褐色	粘土	灰黃褐色。栗褐色粘土が頭かく 覆合している。	
	2	10YWR6/2 灰黃褐色	火山灰	「灰色大山灰」	10TR3/1 黒褐色	粘土			
	3a	10YRS5/1 灰褐色	粘土	細かくマンガン酸を含む	10YR6/2 灰黃褐色	粘土			
	3b	10YTR4/4 灰色	粘土質シルト	(測定位置)	10TR3/3 黑褐色	粘土			
	3c	10YTR4/4 灰褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む	10YR7/4 に多い青褐色	シルト	灰褐色粘土と多い 青褐色シルトの混合層		
	3d	10YTR4/4 黒褐色	粘土		10YR7/1 オリーブ頭	粘土			
	3e	10YK3/2 出灰色	粘土		10TR3/1 黒褐色	粘土	黑褐色粘土と多い青褐色シルトの混合層		
	3f	10YTR4/2 灰黃褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む	10YR6/4 に多い青褐色	シルト			
	3g	10YR5/2 黑褐色	シルト質粘土	褐色土を多く含む	10TR4/6 黑色	粘土シルト			
	3h	5Y4/1 灰色	粘土	「黒褐色」(10TR4/2)、「灰褐色」(10TR4/4)	10YR4/1 黑褐色	粘土	灰褐色粘土がまじる		
	3i	10YTR4/1 黑褐色	粘土		2.5Y5/1 灰色	粘土	黑褐色粘土を含む	(アライケ)	
	4b	10YR3/1 灰土	粘土						
	4c	10YRS5/1 灰褐色	粘土	3a層に灰土。地上に灰土を含む					
	4d	10YR7/6 可燃性褐色	粘土	3b層と黒褐色粘土。(測定位置)					
	4e	10YR4/2 灰褐色	粘土						
	4f	2.5Y5/1 灰色	粘土						
	4g	5Y5/1 灰色	粘土						
	4h	10YR4/2 灰褐色	粘土	褐鐵酸化粘土(唐草)を含む(測定位置)					

第135図 SD2000 断面図

W250

W200

外溝

第118次

S100

第85次B区

(SB1278)

SA1283

第147次

第33次

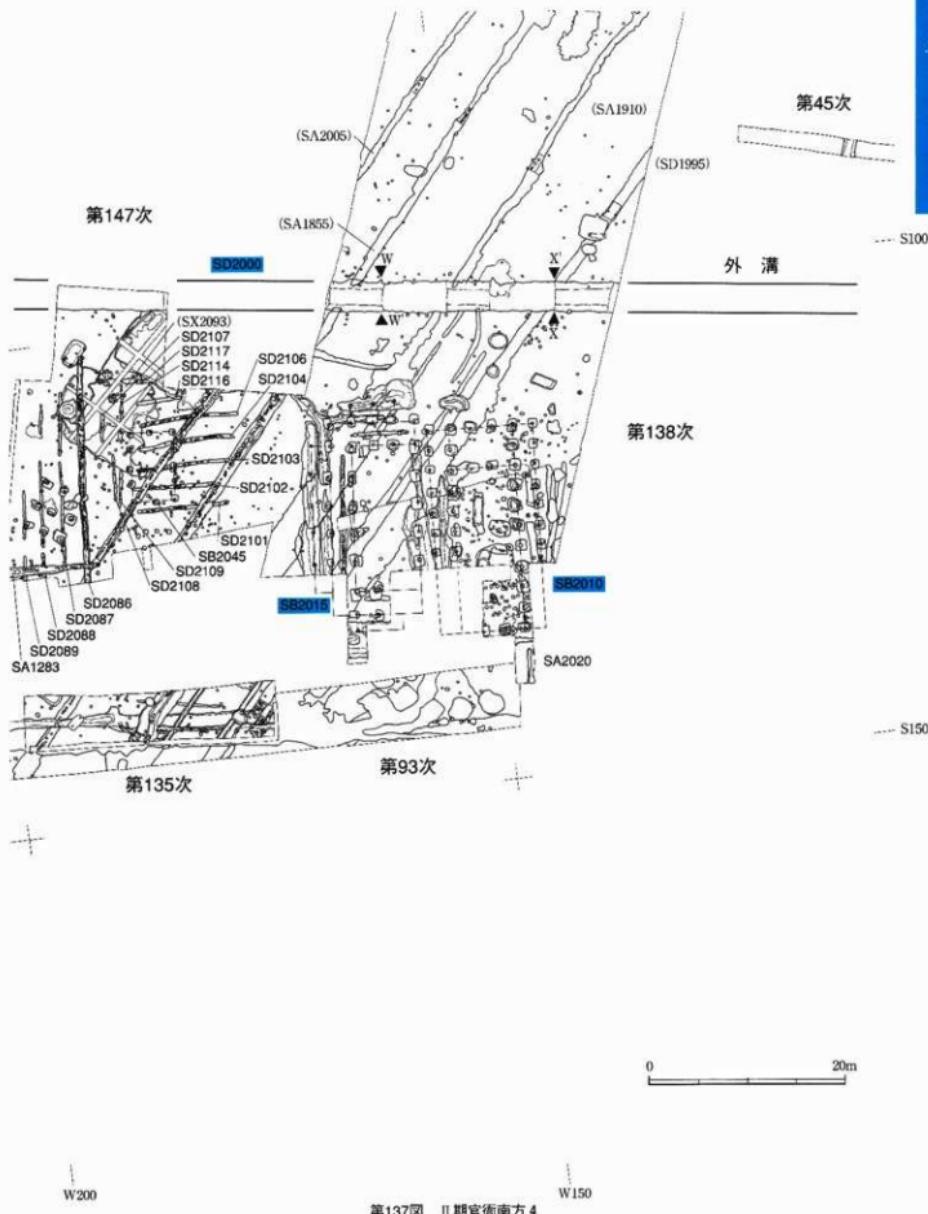
S150

第84次

第93次

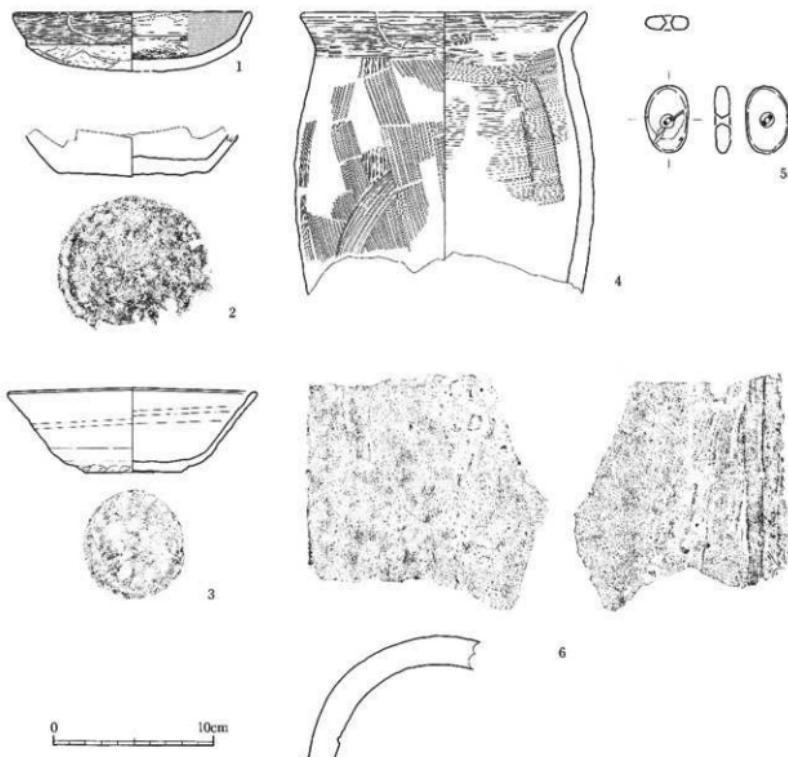
0 20m

第136図 Ⅱ期官衙南方 3



り凸面に擦り消しが施されたF-95丸瓦(第138図6)、焼け面のある砾石器、第4層上面よりは内面が黒色処理され体部中央に段のある土師器C-897壺(第138図1)、第4層中より外面がハケメ調整された長胴形の土師器C-900壺(第138図4)、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E-454壺(第138図3)、第6層中より底部のみの繩文土器A-4鉢(第138図2)、直径0.3cm程の孔のあるK-250有孔石製品(第138図5)、内面にカエリのある須恵器の蓋などが出土している。また第65次調査区内の堆積土中からは塊形滓や丸瓦片(註15)、第124次調査区内の堆積土中からは底部に回転ヘラケズリの施された須恵器壺やカエリのある蓋と対になる須恵器壺、繩叩きの後ナデ調整のされた桶巻き作りの平瓦片(註16)などが出土している。

第138次調査区ではSA1855・1910材木列、SD1952・1955溝跡を切っている。第65次調査区ではSI992竪穴住居跡を切り、SD345・1164溝跡に切られている。



層段	標識番号	幅員	断面	出土地点	出土地點	遺物名	外側測量	内側測量	参考	年份
1	C-897	土師器	壺	SD2000	4	器内26 口径14.9 壁厚13.4	口縁部ヨコナギ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	A II	773
2	A-4	繩文土器	鉢	SD2000	燒面	外径23.0 壁厚4.4	体部ヨガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ	773	
3	E-454	須恵器	壺	SD2000	4	腹高5.2 口径15.8 壁厚6.0	1面高・底面ヨコナギ、底部持手ヘラケズリ	ヨロナギ	II lb	773
4	C-900	土師器	壺	SD2000	4	腹高17.6 口径17.8	口縁部ヨコナギ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ	H1	773
5	K-250	有孔石製品	砾石類似	SD2000	6	直徑0.42 横幅0.28 厚さ0.09	穴に輪郭ケズリ痕有			773
6	F-95	瓦	丸瓦	SD2000	3	輪厚10.7 直径14.4	凸面すり削し、円周あ切りのち漆目底、ケズリ			773

第138図 SD2000 出土遺物

[南方官衙東地区]

SB1191建物跡（第65次・第140図）

東西5間かそれ以上、総長13mかそれ以上（柱間寸法250～270cm）、南北1間以上、総長2.7m以上（柱間寸法270cm）の東西棟の建物跡で、東西柱列の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺74～190cmの隅丸方形か隅丸台形で、深さは99cm程のものがある。柱痕跡は直径22～35cmであるが、30cmのものが多い。周囲の掘立柱建物跡と比べて柱痕跡や掘り方の規模で傑出している。建物の北と東側をSD1190・1308溝跡が140～180cm程離れて巡っている。

SD345・921・1305溝跡に切られている。

SB1306建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.7m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法250～265cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-2°-Sである。柱穴は一辺70～155cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは42～92cmである。柱痕跡は直径15～34cmで、20cm前後のものが多い。痕跡の中に焼土と炭化物を含んでいることから、火災に遭ったと考えられる。建物の東、西、南側をSD1319・1188・1180溝跡が、柱穴より100～120cm離れて巡っている。

遺物は柱穴掘り方より、底部より体部へ屈曲して立ち上がる土師器<中>C-123壺などが出土している。

SD345溝跡に切られている。

SB1320建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.5m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法230～280cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺70～210cmの隅丸方形か隅丸長方形で、柱痕跡は直径13～33cmであるが、20～30cmのものが多い。抜き取りがあり、その深度が深いため柱痕跡が検出されない柱穴もある。

遺物の東、南側をSD1333・1336溝跡が、柱穴より110～150cm離れて巡っている。これらの溝跡の堆積土中には焼土と炭化物が含まれ、柱の抜き取り穴にも炭化物が含まれるものがあることから、SB1320建物跡が火災に遭ったと考えられる。

遺物は柱穴抜き取り穴より、土師器<中>C-94・124壺などが出土している。

SB1321建物跡（第65次・第140図）

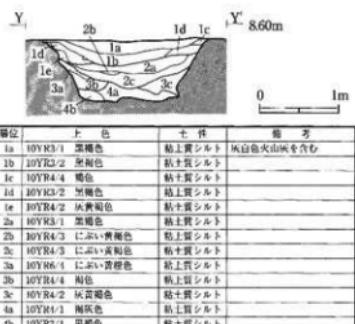
桁行10間、総長23.3m（柱間寸法210～270cm）、梁行2間、総長5m（柱間寸法250cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-3°-Sである。柱穴は一辺85～155cmの隅丸方形か隅丸長方形であるが、周囲の建物跡の柱穴掘り方に比べ平面形が丸みを帯びている。柱穴の深さは60～70cm程で、柱痕跡は直径11～25cmで、20cm前後のものが多い。抜き取りは認められない。

SD476溝跡（第41、94次・第141図）

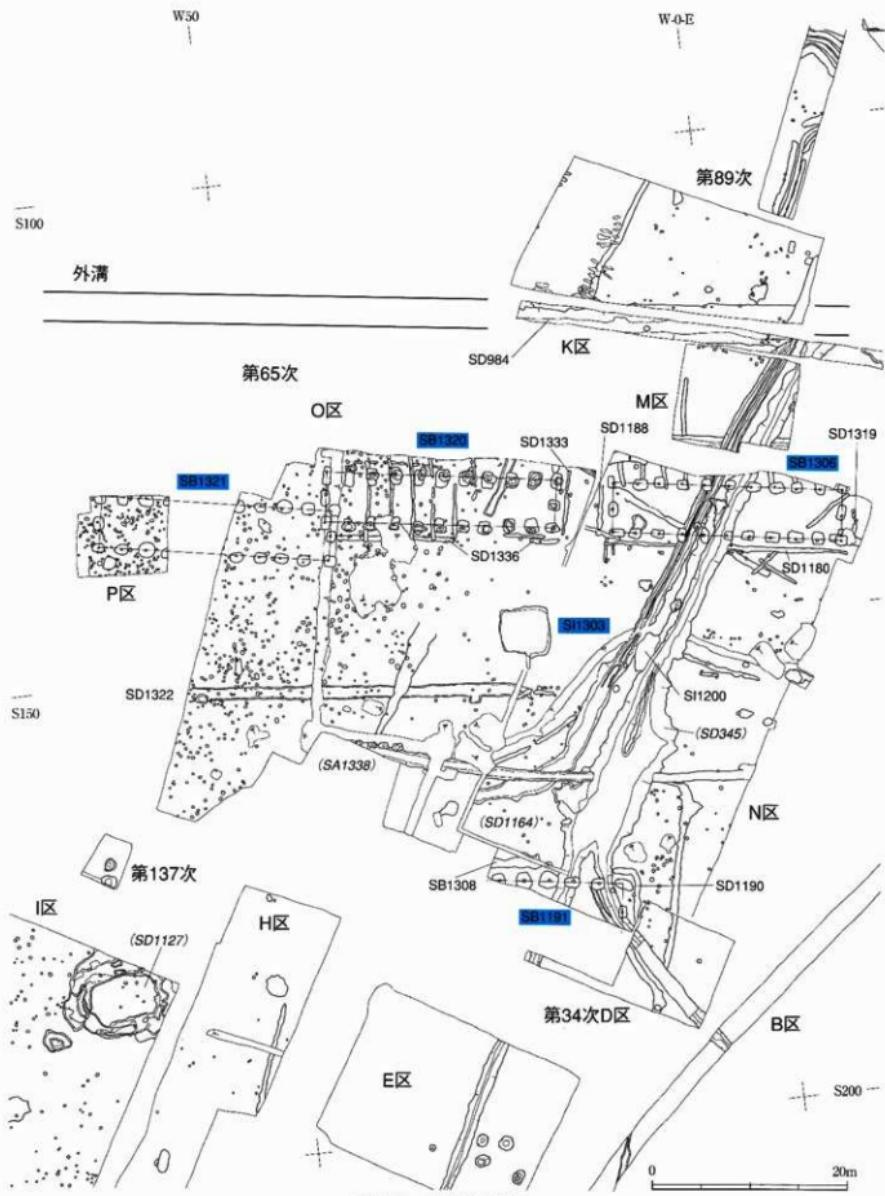
上幅150～270cm、底面幅60～160cm、深さ70～100cm程、断面形は逆台形あるいは扁平なU字形の溝跡であり、おおむね平坦である。南の第41次調査区にも続く溝跡である。方向はN-2°-WからN-0°-Eで、第41次調査から第94次調査まで45m程検出し、さらに南北に続いている。堆積土は4層である。第41次調査区内では、最上層に灰白色火山灰が多量に含まれていた。外溝の形状に類似している。

遺物は堆積土中から土師器、須恵器片が少量出土している。

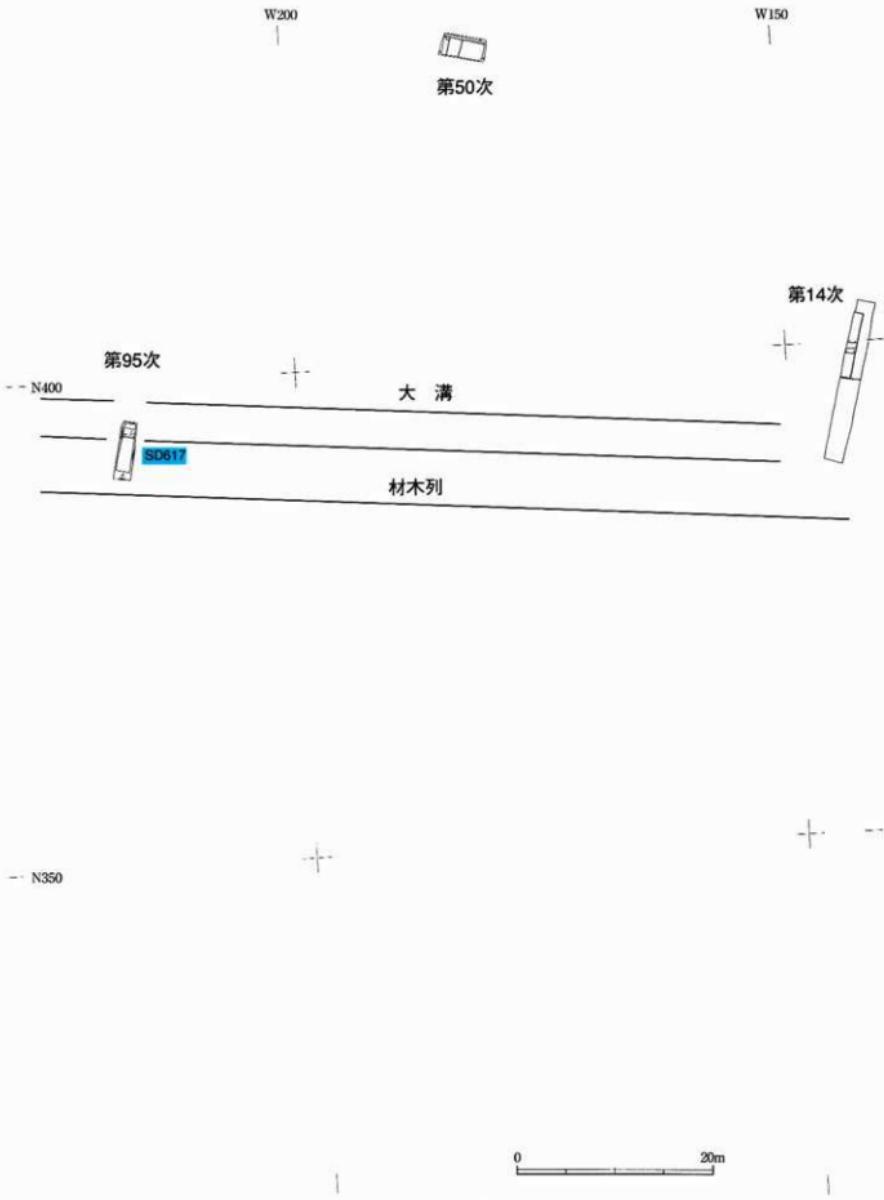
SI1361堅穴住居跡を切り、SD1356溝跡に切られている。



第139図 SD476 断面図



第140図 Ⅱ期官衙南方5



第131図 方四町Ⅱ期官衙北辺1

W100

W50

— N400

第79次

大溝

木材列

(SI1201)

(SI1206)

第148次

(SI2084)

— N350

+

第30次

第1次



0

20m

第132図 方四町Ⅱ期官衙北辺2

2. 南方官衙

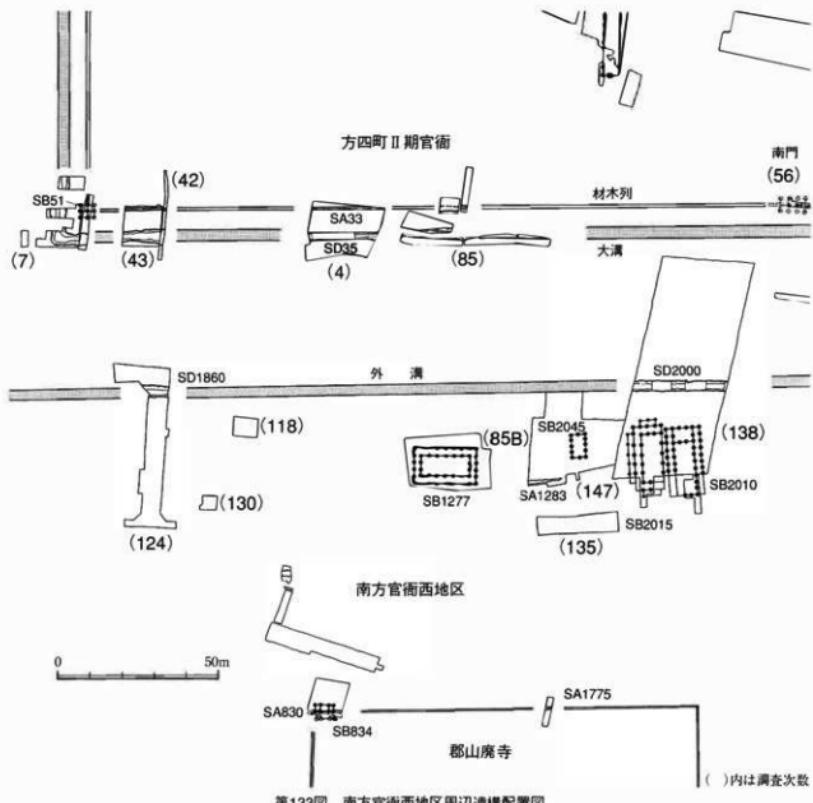
南方官衙は方四町II期官衙の南に、正殿やその周辺の主要建物と同等か、より規模が大きい建物により構成されている。建物の北側は「外溝」としたSD2000溝跡(註14)により遮蔽されており、その南側に整然と並んでいる。便宜上、東地区と西地区に分けているが、どのようなまとまりになって機能していたかについては明らかではない。

【南方官衙西地区】

SB1277建物跡 (第85次・第133、136図)

桁行8間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法240~278cm、平均260cm、廊部分柱間寸法185~218cm、平均199cm)、梁行5間、総長11m(身舎部分柱間寸法190~225cm、平均207cm、廊部分柱間寸法227~257cm、平均240cm)の東西棟の四面廻付建物跡で、梁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺62~142cmの隅丸長方形、隅丸方形、あるいは不整形を呈する。柱痕跡は身舎で直径23~31cm、廊で直径18~31cmである。柱穴の深さは廊で14~24cmである。柱穴掘りの方の埋土や柱痕跡には炭化物や焼土は含まれていない。

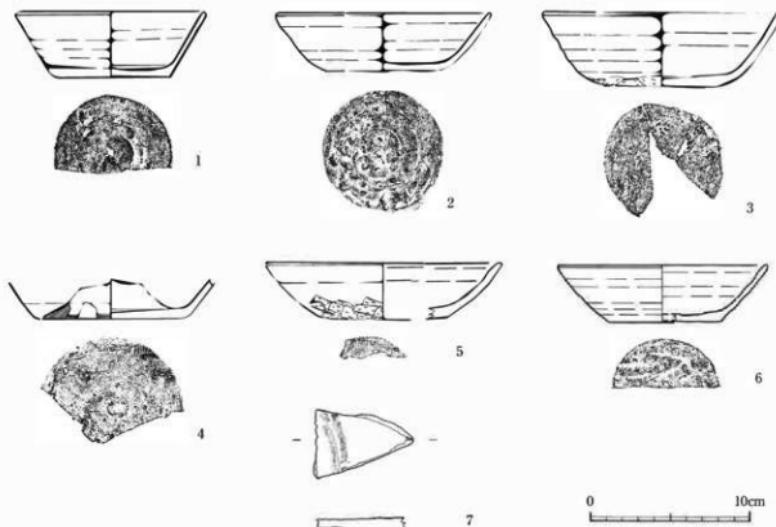
SB1278・1280建物跡、SA1283材木列を切っている。



SB2010建物跡（第138次・第133、137図）

桁行10間、総長21m（身舎部分柱間寸法200~220cm、平均210cm）、梁行5間、総長10.8m（身舎部分柱間寸法210~220cm、平均220cm、廂部分柱間寸法200~220cm）の南北棟で、東西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN-3°-Wである。身舎の柱穴は一辺85~120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径25~38cmの円形または梢円形である。身舎は北から2間のところで仕切られている。柱穴掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に比べてやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取り、あるいは切り取りを受けており、柱下部が地中に残ったもの（N10E2柱穴）もある。

遺物は掘り方中では、N7E1から器種は不明であるが外面に二条の墨痕のある土師器C-916底部片（第134図7、写真図版772）、N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN-110釘（写真図版772）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N-109（写真図版772）が出土している。抜き取り穴ではN5E2から高さ6.5cm以上の円面鏡、N6E1からは底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-456坏（第134図1）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N-108（写真図版772）、N9E2からは回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E-458坏（第134図4）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E-466蓋の破片（写真図版772）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK-253鉱石（写真図版772）が出土している。このほかN11E2の抜き取り穴からは、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラ



図版 番号	登録 番号	種類	器形	出土地点 出土遺構	寸法 段級	法量 (cm)	外面調整	内面調整	備考	調査 次数	写真 図版
1	E-456	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径12.0 底径7.4	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1b	138	772
2	E-467	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径13.6 底径2.2	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1b	138	772
3	E-451	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径14.4 底径15.0 底厚7.0	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1b	138	772
4	E-458	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径2.5 底径2.5	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1	138	772
5	E-453	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径3.6 底径14.7 底厚7.8	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1b	138	772
6	E-452	須恵器	坏	SB2010E1	身舎1	口径3.6 底径13.1 底厚7.0	口縁部・底部・ロクロナデ	口縁部・底部・ロクロナデ	II 1b	138	772
7	C-916	土師器	坏	SB2010E1	身舎1	長5.5	二条の墨痕あり	黒色処理	A	138	772

第134図 SB2010 出土遺物

ケズリがされた須恵器E-452・467壺(第134図6、2)、底部に手持ちヘラケズリのみが観察される須恵器E-453壺(第134図5)などの多くの遺物が出土している。

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015建物跡(第138次・第133、137図)

桁行7間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法280~310cm、平均298cm、廂部分柱間寸法230cm)、梁行4間、総長8.8m(身舎部分柱間寸法200~225cm、平均215cm、廂部分柱間寸法225cm)の南北棟で、南、北、西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN=1°-Wである。身舎の柱穴は一辺83~140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径20~40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60~123cmの長方形で、柱板痕跡は直径20~36cmの円形または楕円形である。各柱穴の掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に比べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、西桁行の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡の中には、木質部が残っているもの(N2E5、N3E5、N5E5柱穴)がある。さらに廂のある建物の南、北、西側には、掘り方が直径27~40cm程の円形で、直径10~14cmの柱痕跡が伴う柱穴が取り付いている。

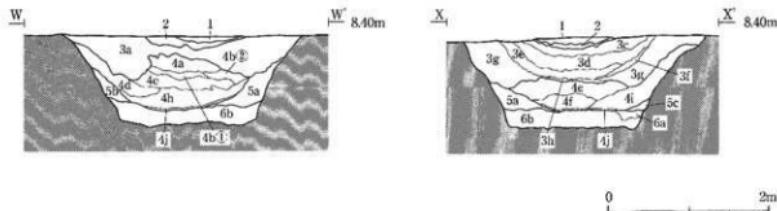
遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られている。

SD2000溝跡(第138次・第133、137図)

上幅300~340cm、底面幅160~170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査のSD984溝跡や第124次調査のSD1860溝跡と連続する遺構である。方向はE=0°-S(真東西)で、第65次調査から第124次調査で検出した箇所まで360m程である。方四町II期官街の外郭大溝と心々で48~50m離れて平行している。堆積土中の第2層は灰白色火山灰である。

遺物は第138次調査区内の第1層中より底部に回転系切り痕跡が観察される土師器壺、鉄滓、鉄片、第3層中よ



遺構名	位置	土 色	土 性	備 考	遺構名	位置	土 色	土 性	備 考
SD2000	1	10YTR4/2 灰褐色	粘土		1b	2.5Y7/2 灰褐色	粘土	灰褐色	黒褐色粘土が頭かく
	2	10YWR6/2 灰褐色	火山灰	「灰褐色火山灰」	10TR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色	混合している	
	3a	10YRS5/1 灰褐色	粘土	細かくマンガン酸を含む	10YR6/2 灰褐色	粘土	灰褐色		
	3b	10YTR4/4 灰色	粘土質シルト	(測定位置)	10TR3/3 黒褐色	粘土	灰褐色		
	3c	10YTR4/4 灰褐色	粘土		10YR7/4 に多い青褐色	シルト	灰褐色	黒褐色粘土とともに、青褐色シルトの混在層	
	3d	10YTR4/4 灰褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む	3Y3/1 オリーブ頭	粘土	灰褐色		
	3e	10YTR4/2 灰褐色	粘土		3a	10TR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土に多い青褐色シルトの混合層	
	3f	10YTR4/2 灰褐色	粘土		3b	10TR4/6 黑色	粘土シルト	黒褐色	
	3g	10YTR4/2 灰褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む	3c	10YR4/1 黒褐色	粘土	灰褐色粘土がはじまる	
	3h	10YR5/2 黑褐色	シルト質粘土	褐色土を多く含む	3d	2.5Y5/1 黄褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
SI2000	4a	5Y4/1 灰色	粘土	「黒褐色」とは「黒褐色」	3e	10YR4/1 黑褐色	粘土	灰褐色粘土がはじまる	
	4b	10YRA4/1 灰褐色	粘土		3f	2.5Y5/1 黄褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4c	10YR3/1 黑褐色	粘土		3g	2.5Y5/1 黄褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4d	10YR5/1 黑褐色	粘土	3a層に灰土。地上に廃棄物を含む	3h	10YR6/4 可燃性	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4e	10YR7/6 可燃性	粘土	3b層と黒褐色粘土。(測定位置)	3i	10YR4/2 灰褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4f	10YR4/2 灰褐色	粘土		3j	2.5Y5/1 黄褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4g	2.5Y4/1 黄褐色	粘土		3k	10YR4/1 黑褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	
	4h	10YR4/2 灰褐色	粘土	細粒漂浮物と「青褐色」を含む	3l	2.5Y5/1 黄褐色	粘土	黒褐色粘土を含む(アライ型)	

第135図 SD2000 断面図

W250

W200

外溝

第118次

S100

第85次B区

(SB1278)

SA1283

第147次

第33次

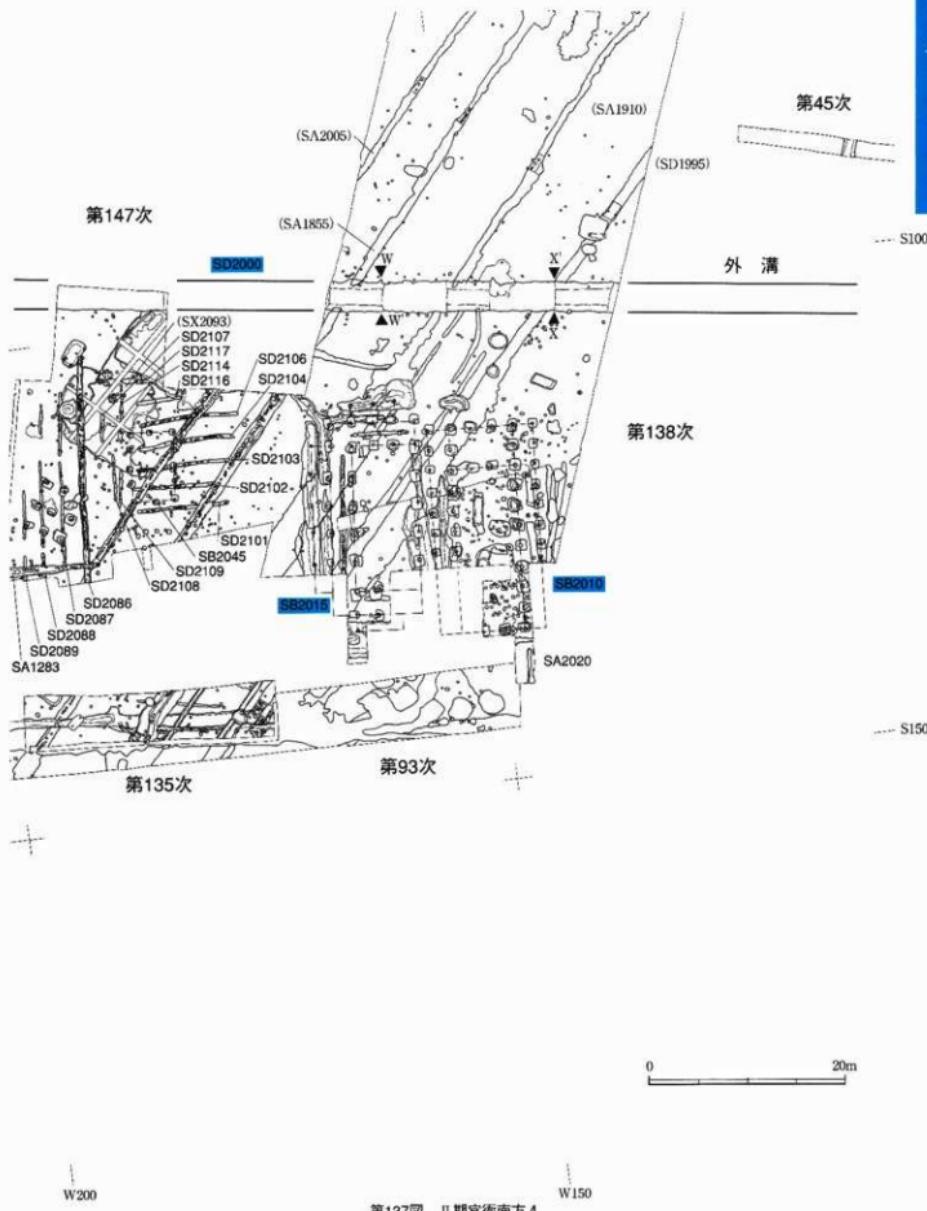
S150

第84次

第93次

0 20m

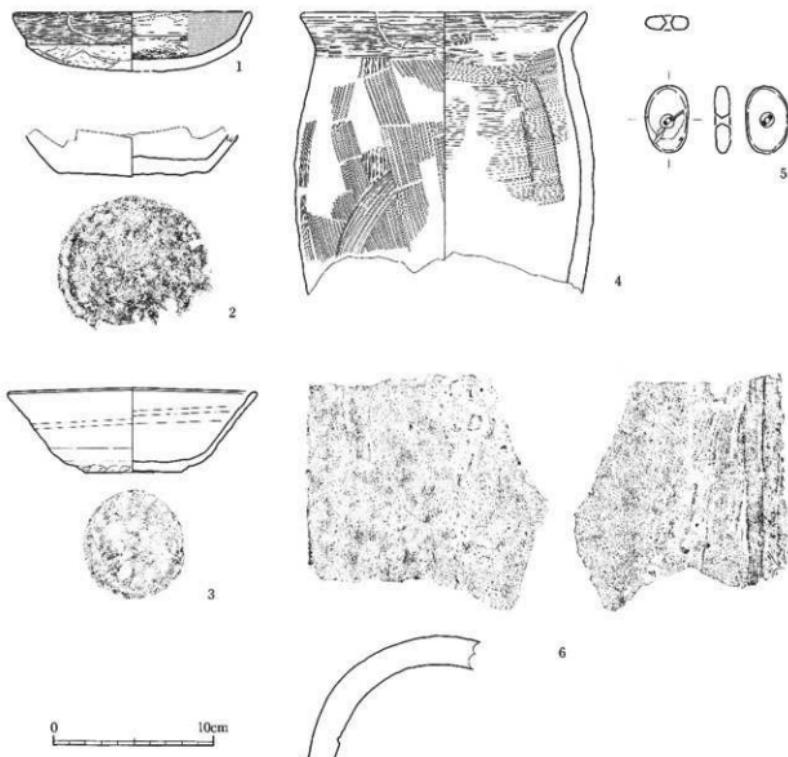
第136図 Ⅱ期官衙南方 3



第137図 II期官衙南方4

り凸面に擦り消しが施されたF-95丸瓦(第138図6)、焼け面のある砾石器、第4層上面よりは内面が黒色処理され体部中央に段のある土師器C-897壺(第138図1)、第4層中より外面がハケメ調整された長胴形の土師器C-900壺(第138図4)、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E-454壺(第138図3)、第6層中より底部のみの繩文土器A-4鉢(第138図2)、直径0.3cm程の孔のあるK-250有孔石製品(第138図5)、内面にカエリのある須恵器の蓋などが出土している。また第65次調査区内の堆積土中からは塊形滓や丸瓦片(註15)、第124次調査区内の堆積土中からは底部に回転ヘラケズリの施された須恵器壺やカエリのある蓋と対になる須恵器壺、繩叩きの後ナデ調整のされた桶巻き作りの平瓦片(註16)などが出土している。

第138次調査区ではSA1855・1910材木列、SD1952・1955溝跡を切っている。第65次調査区ではSI992竪穴住居跡を切り、SD345・1164溝跡に切られている。



層段	標識番号	幅員	断面	出土地点	出土地點	遺物	測量 (cm)	外面調査	内面調査	参考	年份
1	C-897	土師器	壺	SD2000	4	器高26.1口径49.0直径13.4		口縁部ヨコナギ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	A II	773
2	A-4	繩文土器	鉢	SD2000	5	底面 外径23.0 直径9.4		体部ヨガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ		773
3	E-454	須恵器	壺	SD2000	4	器高5.2 口径15.8 直径6.0		1面底・側面ヨコナギ、底部持手ヘラケズリ	ヨロナギ	II Ib	773
4	C-900	土師器	壺	SD2000	4	器高17.6 口径17.8		口縁部ヨコナギ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ	H1	773
5	K-250	有孔石製品	砾石	SD2000	6	直径4.2 横幅2.8 厚さ0.9		穴に輪削ケズリ痕有			773
6	F-95	瓦	丸瓦	SD2000	3	輪厚10.7 直径14.4		凸面すり削し、凹面あ切りのち漆目底、ケズリ			773

第138図 SD2000 出土遺物

[南方官衙東地区]

SB1191建物跡（第65次・第140図）

東西5間かそれ以上、総長13mかそれ以上（柱間寸法250～270cm）、南北1間以上、総長2.7m以上（柱間寸法270cm）の東西棟の建物跡で、東西柱列の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺74～190cmの隅丸方形か隅丸台形で、深さは99cm程のものがある。柱痕跡は直径22～35cmであるが、30cmのものが多い。周囲の掘立柱建物跡と比べて柱痕跡や掘り方の規模で傑出している。建物の北と東側をSD1190・1308溝跡が140～180cm程離れて巡っている。

SD345・921・1305溝跡に切られている。

SB1306建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.7m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法250～265cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-2°-Sである。柱穴は一辺70～155cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは42～92cmである。柱痕跡は直径15～34cmで、20cm前後のものが多い。痕跡の中に焼土と炭化物を含んでいることから、火災に遭ったと考えられる。建物の東、西、南側をSD1319・1188・1180溝跡が、柱穴より100～120cm離れて巡っている。

遺物は柱穴掘り方より、底部より体部へ屈曲して立ち上がる土師器<中>C-123壺などが出土している。

SD345溝跡に切られている。

SB1320建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.5m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法230～280cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺70～210cmの隅丸方形か隅丸長方形で、柱痕跡は直径13～33cmであるが、20～30cmのものが多い。抜き取りがあり、その深度が深いため柱痕跡が検出されない柱穴もある。

遺物の東、南側をSD1333・1336溝跡が、柱穴より110～150cm離れて巡っている。これらの溝跡の堆積土中には焼土と炭化物が含まれ、柱の抜き取り穴にも炭化物が含まれるものがあることから、SB1320建物跡が火災に遭ったと考えられる。

遺物は柱穴抜き取り穴より、土師器<中>C-94・124壺などが出土している。

SB1321建物跡（第65次・第140図）

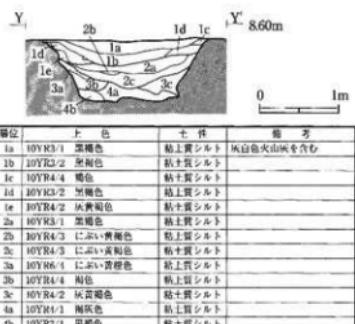
桁行10間、総長23.3m（柱間寸法210～270cm）、梁行2間、総長5m（柱間寸法250cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-3°-Sである。柱穴は一辺85～155cmの隅丸方形か隅丸長方形であるが、周囲の建物跡の柱穴掘り方に比べ平面形が丸みを帯びている。柱穴の深さは60～70cm程で、柱痕跡は直径11～25cmで、20cm前後のものが多い。抜き取りは認められない。

SD476溝跡（第41、94次・第141図）

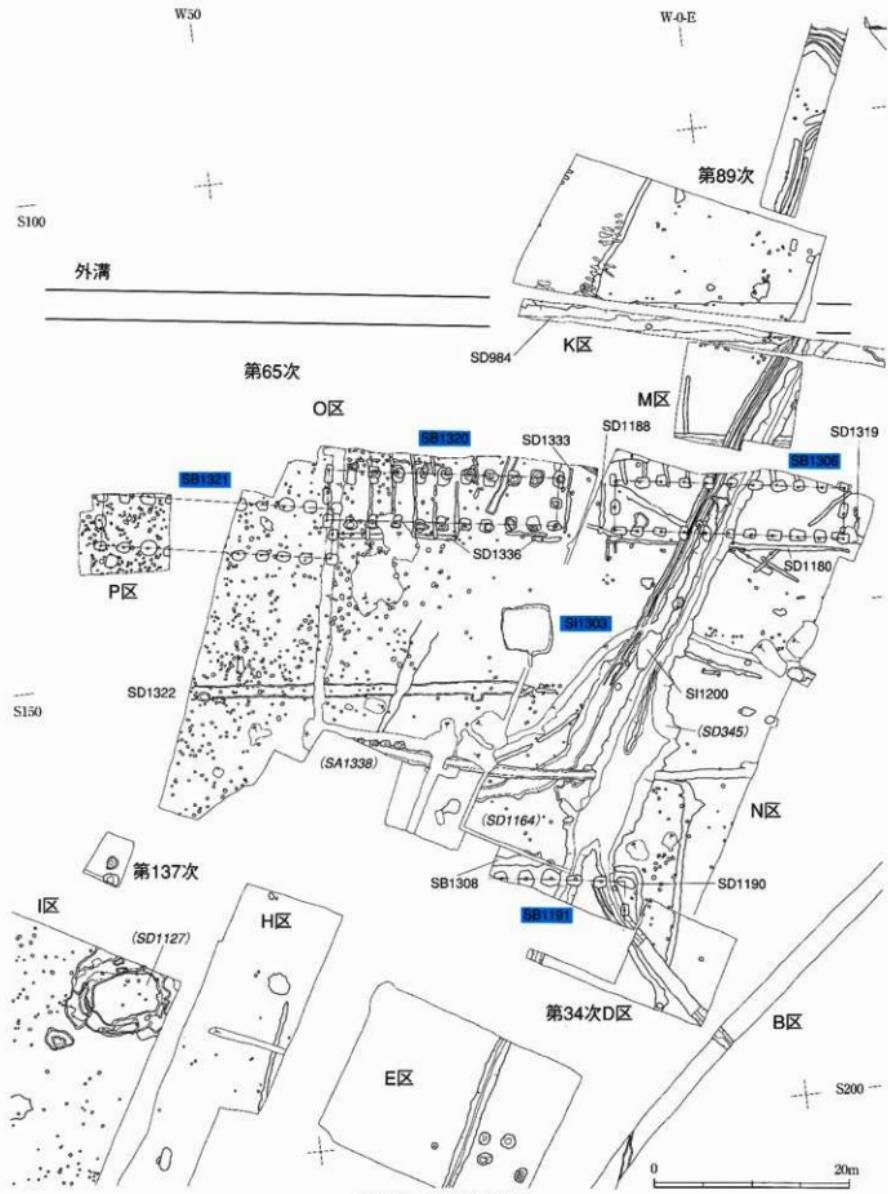
上幅150～270cm、底面幅60～160cm、深さ70～100cm程、断面形は逆台形あるいは扁平なU字形の溝跡であり、おおむね平坦である。南の第41次調査区にも続く溝跡である。方向はN-2°-WからN-0°-Eで、第41次調査から第94次調査まで45m程検出し、さらに南北に続いている。堆積土は4層である。第41次調査区内では、最上層に灰白色火山灰が多量に含まれていた。外溝の形状に類似している。

遺物は堆積土中から土師器、須恵器片が少量出土している。

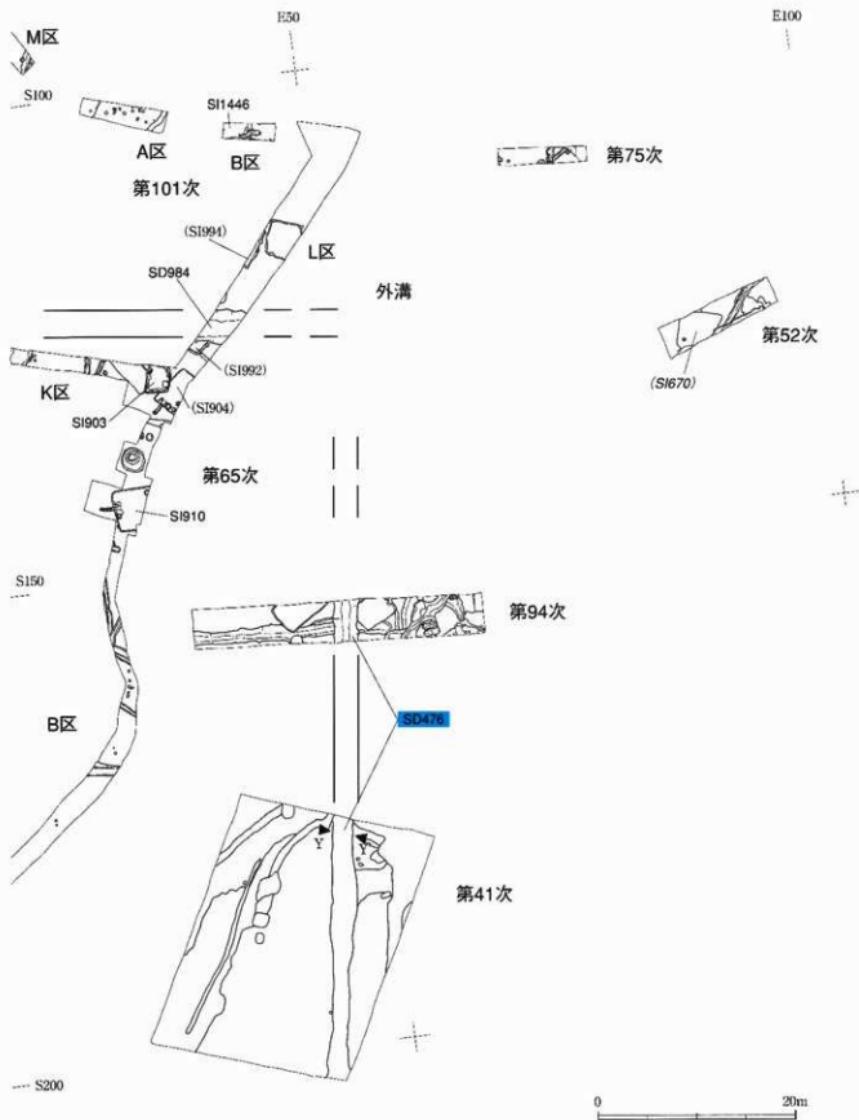
SI1361堅穴住居跡を切り、SD1356溝跡に切られている。



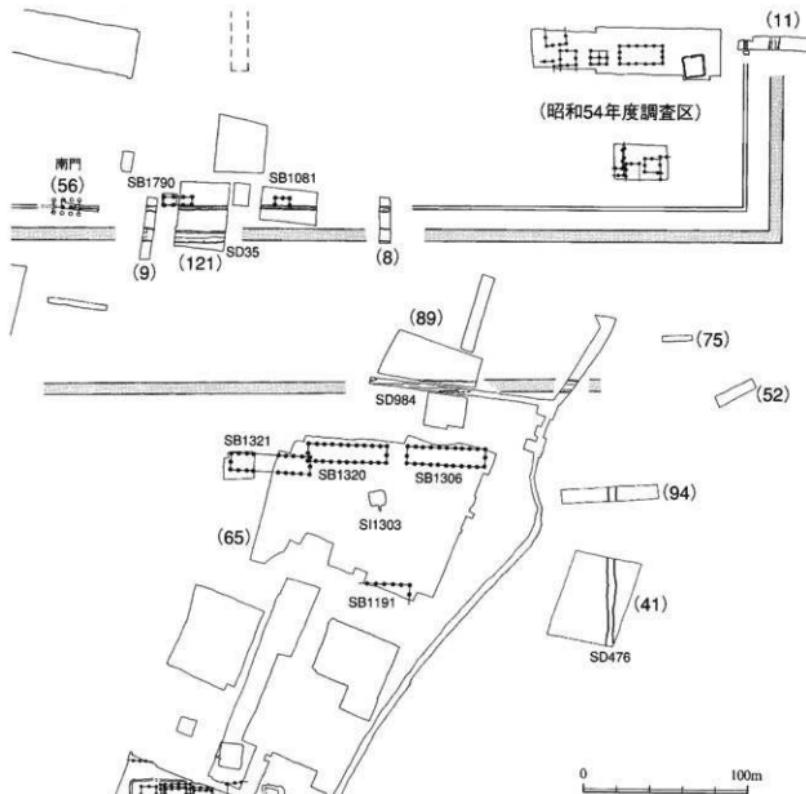
第139図 SD476 断面図



第140図 Ⅱ期官衙南方5



第141図 Ⅱ期官衙南方6



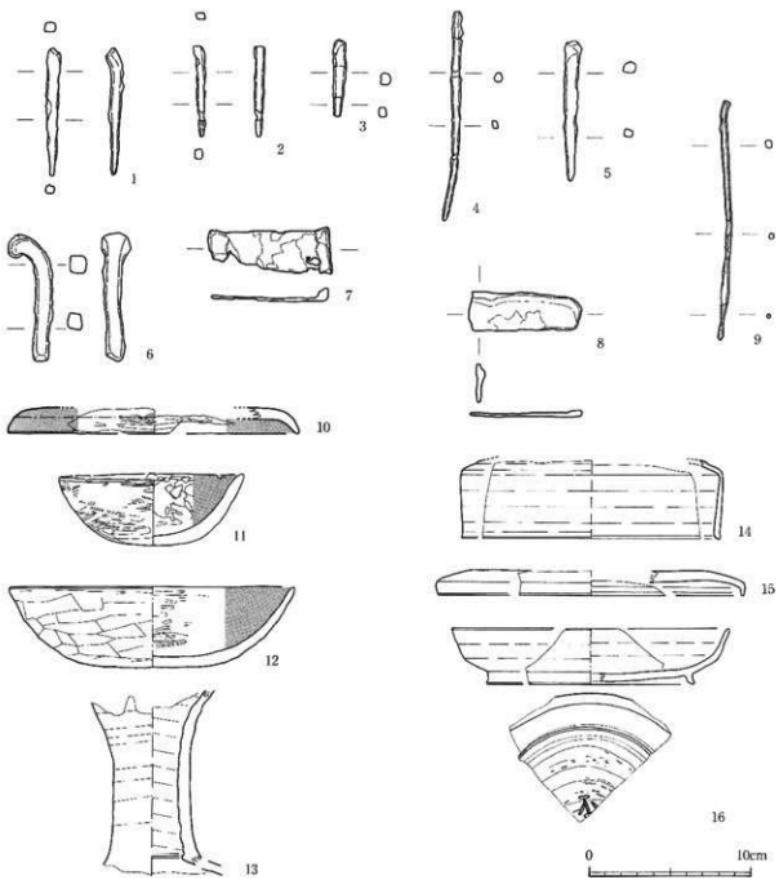
第142図 南方官衙東地区周辺遺構配置図 () 内は検査次数

SI1303豎穴住居跡（第65次・第140、142、144回）

東西5.2m、南北5.1mの隅丸方形で、東壁の方向はN-5°-Eである。壁は直立気味に立ち上がり、高さは40cm残存している。床面はにぼい黄褐色シルト質粘土による貼床で、南側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で直径30~50cm、深さ50~60cmの円形のピットを2個検出した。配置から主柱穴と考えられるが、柱痕跡は検出できなかった。

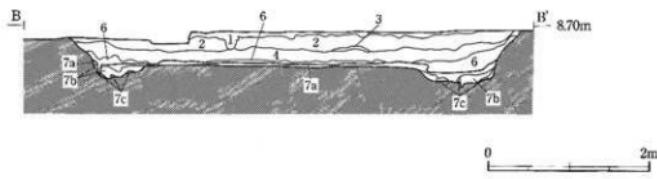
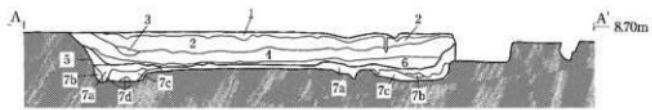
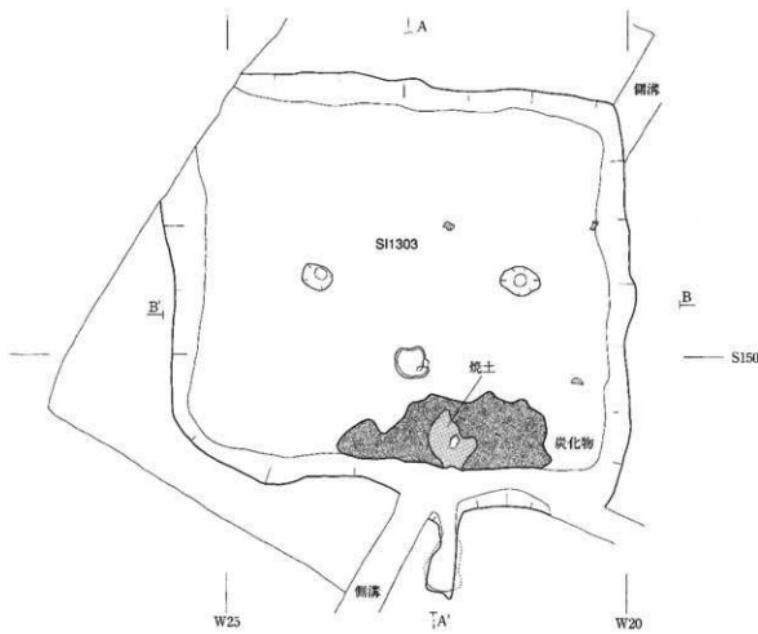
カマドは南壁東寄りにあり、天井部やソデの部分が擾乱を受け煙道のみ検出された。煙道は長さ160cm、上幅25~35cmである。カマド前面の箇所に焼土ならびに炭化物が堆積している。

遺物は住居跡床面近くの堆積土中から体部に段や縫を持たない土師器<中>C-114・115壺(第143図11、12)、両面黒色処理されたC-118蓋(第143図10)、内面にカエリのない須恵器<中>E-83・87蓋(第143図14、15)などが出土している。また堆積土の上層からは底部に「金」もしくは「半」とヘラ書きされた須恵器<中>E-84高台付壺(第143図16)や、釘などの鉄製品が出土している。またこの他に掘り方埋土中から頸部のみの須恵器<中>E-86長頸壺(第143図13)も出土している。



图版 番号	登錄 番号	特徴	器形	出土地点	法量 (cm)	外面觀	内部觀	備考	調査 次數	写真 番組
1	S1303-1	骨製品	針	SI1303	2 長3.80±1 橫0.9 厚3~0.9				65	
2	S1303-2	骨製品	針	SI1303	2 長3.66±0.2 橫0.7 厚2~0.7				65	
3	S1303-3	骨製品	針	SI1303	2 長3.62±0.2 橫0.7 厚2~0.7				65	
4	S1303-4	骨製品	鉗頭	SI1303	2 長2.10±0.03~0.06 厚5.0±0.05				65	
5	S1303-5	骨製品	針	SI1303	2 長3.88 橫0.5~1.1 厚3.05~0.8				65	
6	S1303-6	骨製品	針	SI1303	2 長3.80 橫0.8~1.8 厚3.08~0.9				65	
7	S1303-7	骨製品	不明	SI1303	2 橫2.8~2.8 橫7.4				65	
8	S1303-8	骨製品	不明	SI1303	2 橫2.0~2.4 橫6.8				65	
9	S1303-9	骨製品	鉗頭	SI1303	2 長3.18 橫0.2~0.5 厚5.02~0.04				65	
10	C114	十脚器	蓋	SI1303	4 細径高1.6 口徑17.0	体部へラミガキ、縁部黒色處理	体部へラミガキ、縁部黒色處理		65	
11	C114	上脚器	身	SI1303	4 細径4.5 口徑11.5 底径5.5	ラミケリ→ラミガキ	ラミガキ、黑色處理	AIV2a	65	
12	C115	下脚器	身	SI1303	4 細径5.0 口徑17.7 底径9.9	ラミケリ→ラミガキ、縁部ヘラケリ	ラミガキ、黑色處理	AIV1a	65	
13	E-86	單脚器	身	SI1303	9 細径2.6 口徑11.5	口部部リクロナデ	口部部リクロナデ		65	
14	E-83	單脚器	蓋	SI1303	4 細径高4.8 口徑16.0	ロクロナデ	ロクロナデ	B3	65	
15	E-87	單脚器	身	SI1303	2, 4 細径高1.5 口徑19.0	表面リクロナデ、体部内輪ヘラケリ	表面リクロナデ、体部内輪ヘラケリ	II	65	
16	E-84	單脚器	身	SI1303	2 細径3.5 口径17.2 底径12.8	口輪部リクロナデ、底端部ヘラケリ	口輪部リクロナデ、底端部ヘラケリ	II	65	

第143図 SI1303 出土遺物



層位	土色	土性	構造
1	H0YR3/2 黑褐色	シルト	火山灰を含む
2	H0YR4/2 灰黃褐色	粘土質シルト	火山灰を多量に含む
3	H0YR2/2 黑褐色	シルト質粘土	火山灰と粘土を多量に含む
4	H0YR3/3 鮎褐色	シルト質粘土	火山灰と粘土を微量に含む
5	H0YR4/4 鮎色	シルト	
6	H0YR2/3 黑褐色	シルト質粘土	火山灰を少量化
7a	H0YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	火山灰を多量含む
7b	H0YR5/2 灰黃褐色	シルト質粘土	火山灰を微量に含む
7c	H0YR2/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	火山灰を微量に含む
7d	H0YR6/2 灰黃褐色	シルト質粘土	

第144図 SI1303 平・断面図

3. 寺院西方建物群

方四町II期官衙の南西で、郡山庵寺の北西に位置している。南を木材列(塀)で区画され、その北に掘立柱建物跡が配置されている。建物跡の全容が明らかな遺構には、総柱建物跡が多い。方四町II期官衙の内部でも総柱の建物跡はきわめて稀で、しかも一箇所に集中するような地点は今のところ発見されていない。II期官衙全城でも、この地区のみ複数棟の総柱あるいは束柱のある建物が検出されている。

SB1370建物跡 (第96次・第146図)

桁行7間、総長15m(柱間寸法220cm)、梁行2間、総長5.2m(柱間寸法260cm)の東西棟の建物跡で、方向は梁行(西柱列)でN-2°-W、桁行(南柱列)でE-3°-Nである。柱穴は一辺50~110cmの隅丸方形で、深さは30~50cmである。柱痕跡は直径15~30cmである。内部の柱は、柱穴や柱痕跡とも小規模なものが多く、柱筋も梁列ではほぼ描っているものの、桁列では不揃いとなっている。よって内部の柱は、束柱であると考えられる。S1E5のみ抜き取り穴が検出されている。

遺物は柱穴掘り方より、土師器壺、甕片、須恵器甕片が出土している。

SD1367・1372溝跡、SA272・1380木材列、SB1390・1395建物跡を切り、SD1381溝跡に切られている。

SB1375建物跡 (第96次・第146図)

南北1間以上、総長2.8m以上(柱間寸法280cm)で、建物跡の西南隅と考えられ、柱列の方向はN-0°-E(真北方向)である。柱穴は一辺50~110cmの隅丸長方形で、深さは40~50cmである。柱痕跡は直径28~40cmである。調査区北壁際で落込みを検出しているが、柱間寸法から別遺構の一部と考えられる。

遺物はS2柱穴掘り方より、土師器甕片が1点出土している。

SD1367溝跡に切られている。

SB1390建物跡 (第96次・第146図)

東西2間、総長3.8m(柱間寸法185~190cm)、南北2間、総長3.8m(柱間寸法180~195cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-E、南柱列でE-2°-Sである。柱穴は一辺50~75cmの隅丸方形で、深さは30~40cmである。柱痕跡は直径20~30cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。

SD1372溝跡を切り、SB1370建物跡に切られている。

SB1395建物跡 (第96次・第146図)

東西2間、総長4m(柱間寸法200cm)、南北2間、総長4.4m(柱間寸法210~220cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-W、南柱列でE-2°-Nである。柱穴は一辺50~90cmの隅丸方形で、深さは50cm程である。柱痕跡は直径20~25cmである。一部の柱に抜き取り穴が見られる。調査区の制約から確認できなかったが、南北の規模が2間以上になる可能性が残されている。

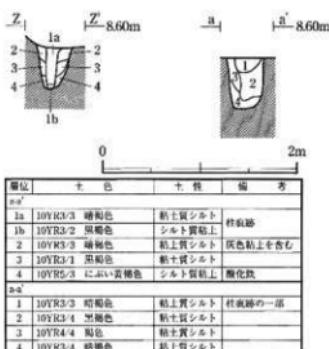
SD1367・1369溝跡、SA1380木材列を切り、SB1370建物跡に切られている。

SA1365木材列 (第96次・第146図)

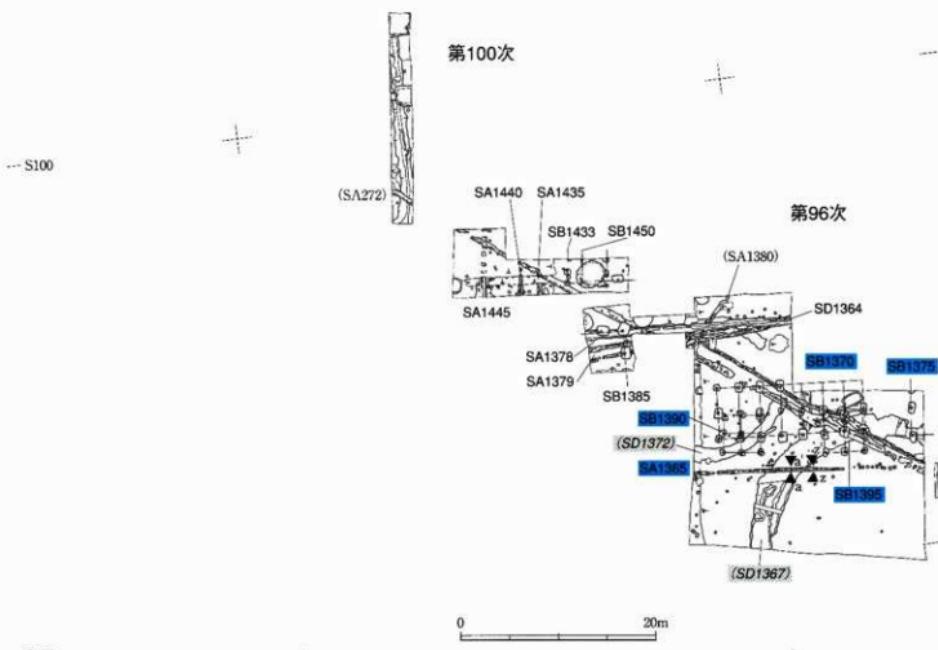
直径5~25cm程の丸材をE-2°-N方向に立て並べている。掘り方は上幅15~35cmで、深さは残存状況の良好な箇所で45~50cm、調査区西半では削平され途切れている。

遺物は掘り方より土師器壺、甕、須恵器甕片が少量出土している。

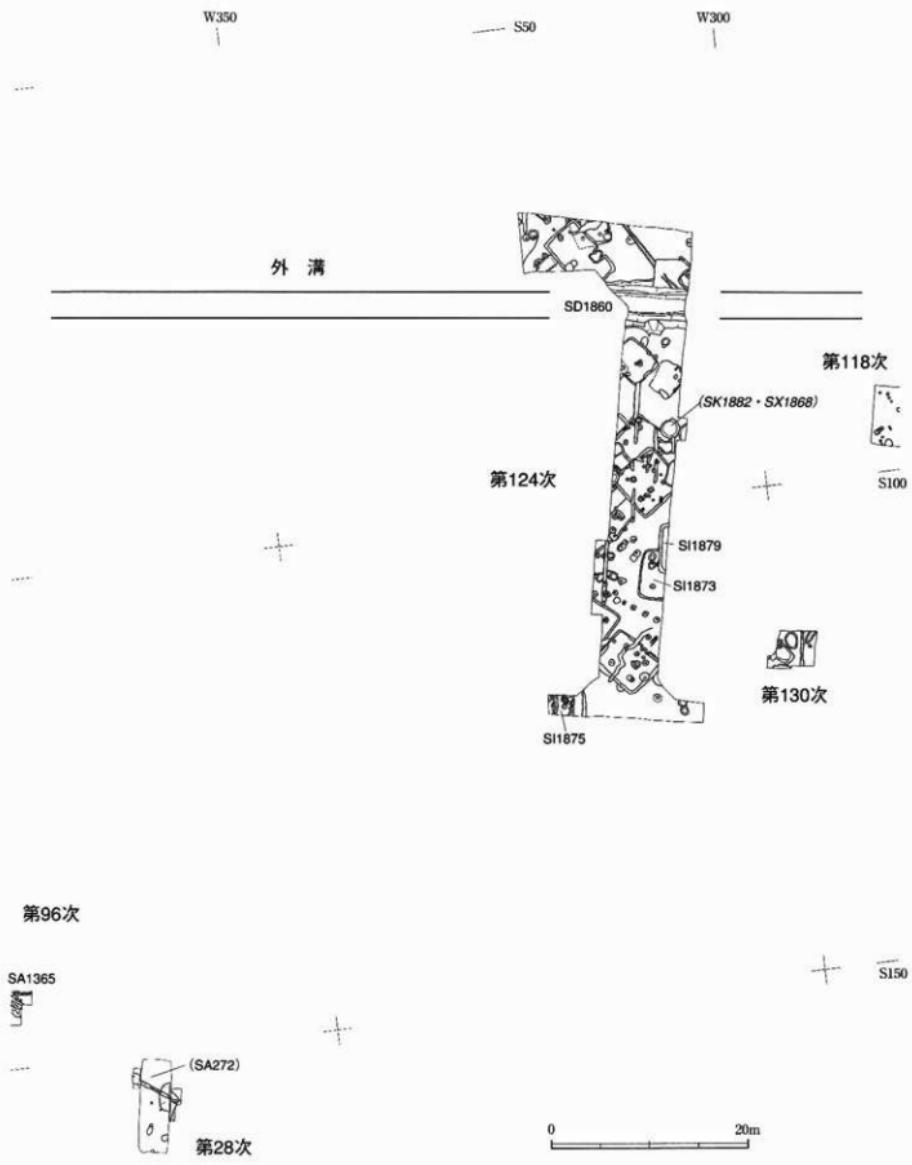
SD1367溝跡、SA272・1380木材列を切り、SD1381溝跡に切られている。



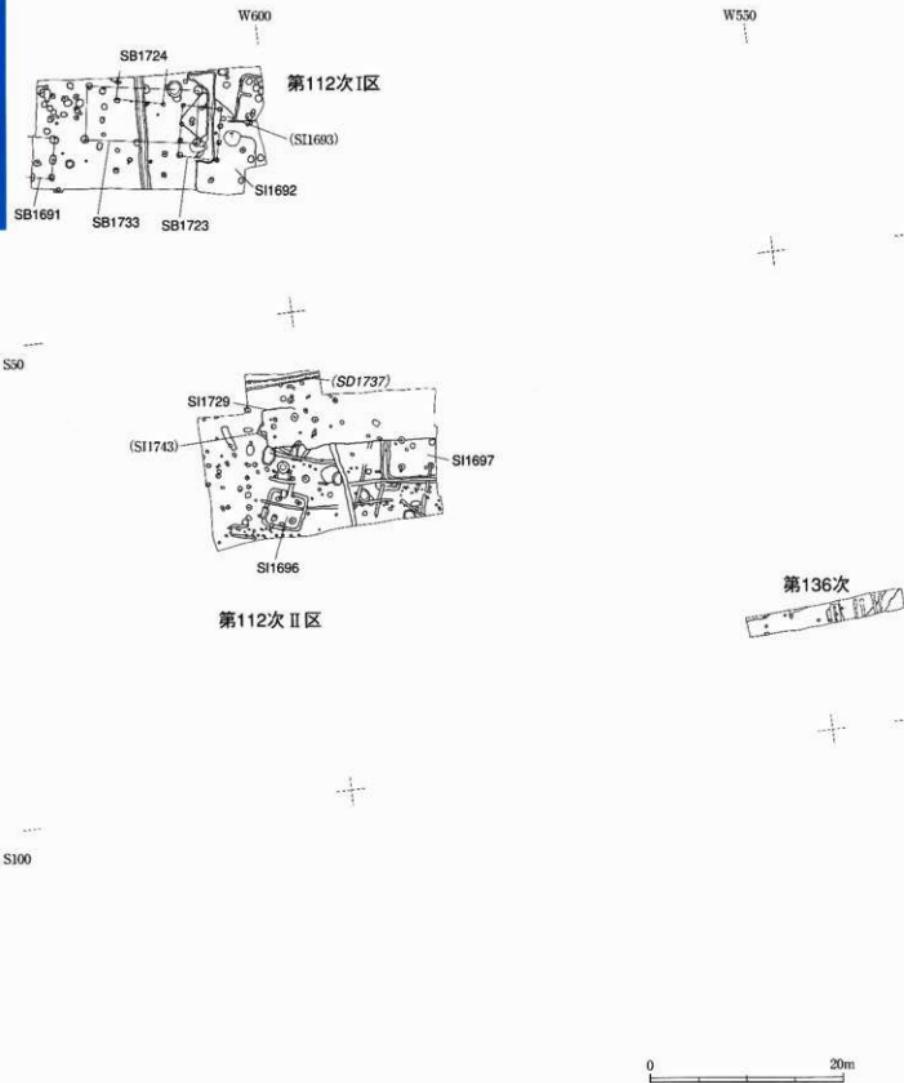
第145図 SA1365 断面図



第146図 II 期官衙南方 1



第147図 II 期官衙南方 2



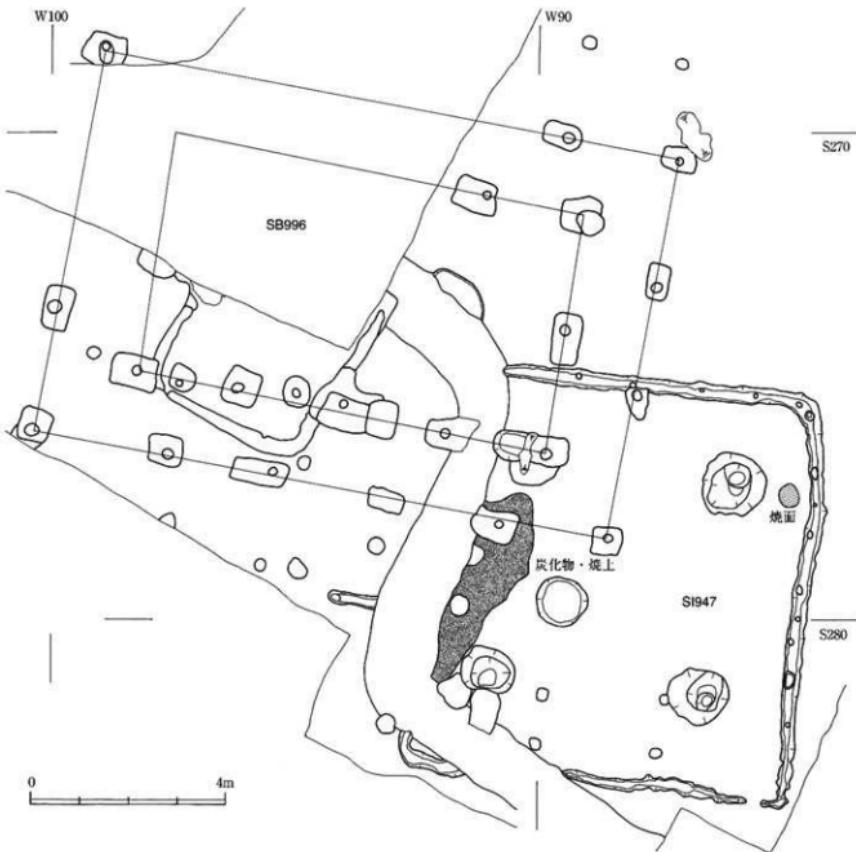
第148図 Ⅱ期官衙西方1

4. 寺院東方建物群

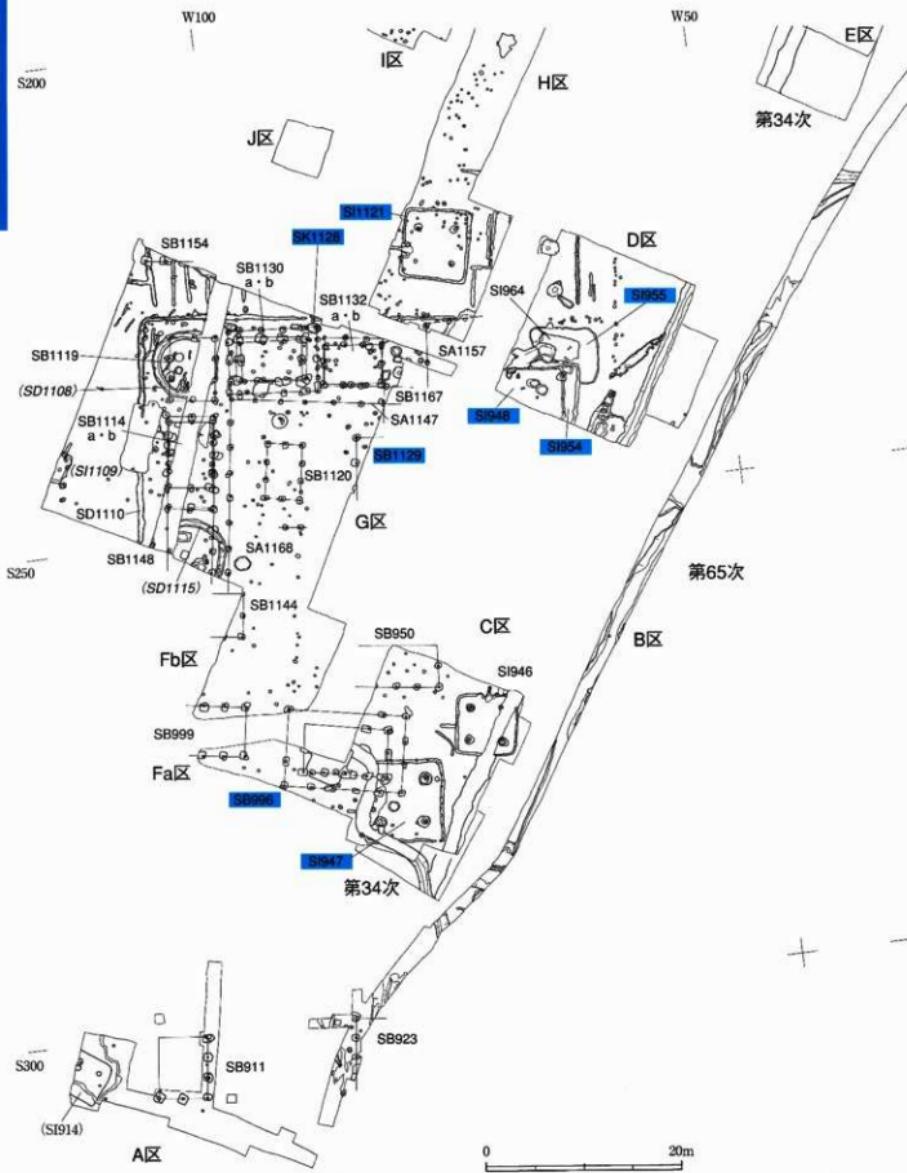
郡山廃寺の東に位置し、16棟ほどの掘立柱建物跡が検出され、3時期の変遷が確認されている。建物の中にはSB1130建物跡やSB996建物跡のように、規模は小さいながら四面廂付建物跡が含まれ、最終時期の遺構群にはSA1147一本柱列による軒跡が伴っている。第65次調査については、正式報告が刊行されているので、記載を省略すべきところではあるが、遺跡全体の年代的な検討の上で重要な遺構、遺物が含まれているので、一部ではあるが掲載する。

SB996建物跡（第65次・第149、150図）

桁行5間、総長12m（身舎部分柱間寸法210～220cm、平均215cm、廂部分柱間寸法220～300cm、平均246cm）、梁行3間、総長8m（身舎部分柱間寸法220～260cm、平均240cm、廂部分柱間寸法220～280cm、平均260cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺60～110cmの隅丸長方形のものが多く、柱



第149図 SB996、SI947 平面図



第150図 郡山廃寺東方1

痕跡は身舎で直径15~26cm、廻で直径14~28cmである。柱穴の深さは、身舎で35~60cmで、廻で30~70cmである。N3E1柱穴の柱痕跡下部の材が残存していた。身舎のN1E1のみに抜き取り穴が見られる。

遺物は掘り方中より土師器坏、甕片や、須恵器坏、甕片が出上している。

SI947・1101堅穴住居跡を切り、SD931溝跡に切られている。

SI947堅穴住居跡 (第65次・第149、150図)

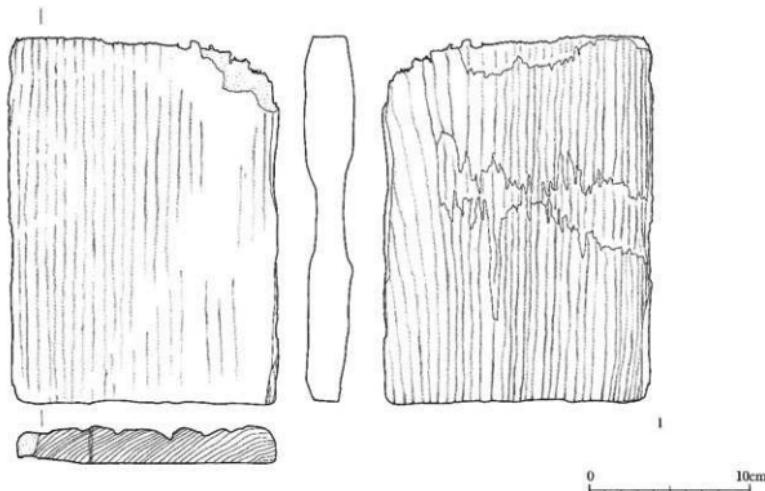
東西8.2m、南北8.6mの隅丸方形で、東壁の方向はN-2°-Wである。壁は垂直気味に立ち上がるところと緩やかに立ち上がるところがあり、高さは15~30cm残存している。床面は褐色灰色粘土による貼床で、西側の床面上に焼土ならびに炭化物が広がっている。床面上で5つのピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1~P4が主柱穴と考えられた。P1、P3からは底面より礎板状に板材が重なり合って出土した。各々の板材は脆弱であったが、P3から出土した板材(第151図1)は、埋設時の形態を明瞭に残していた。

カマドは西壁中に位置したと推定されるが、SD931溝跡に切られ煙道のみ検出された。煙道は残存長100cm、上幅22~27cm、下幅12~16cmで、明瞭ではないが先端がやや凹んでいる。

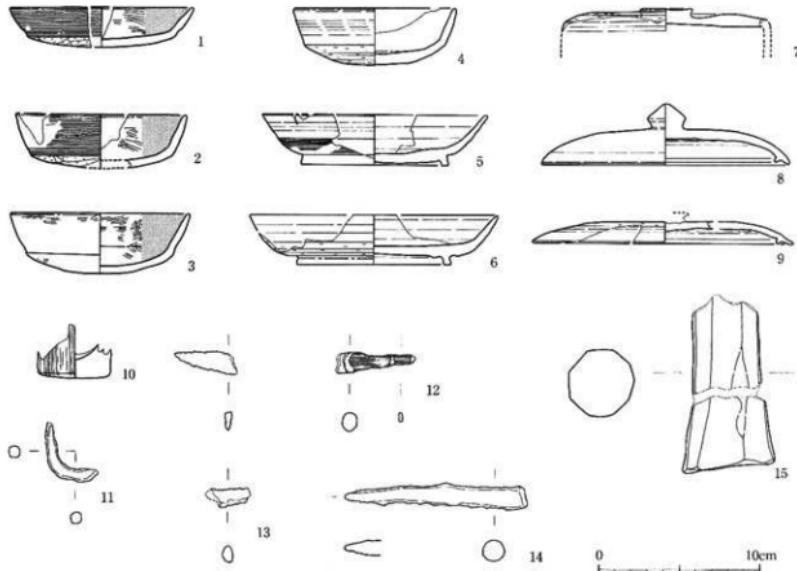
周溝は上幅15~40cm、下幅4~21cm、床面からの深さは7~12cmで、断面形はほぼU字形である。周溝内よりピットを14箇所で検出した。

遺物は住居跡床面から体部の下端に段のある土師器<中>C-8坏(第152図2)、丸底の須恵器<中>E-1坏(第152図4)、器高があまりなく体部が外傾する<中>E-17高台付坏(第152図5)、器高が比較的高いと推定される<中>E-77蓋(第152図7)、天井部が平らな<中>E-19蓋(第152図8)、天井部がさらには低くなる<中>E-18蓋(第152図9)、残欠の鉄製品<中>N-26・27不明品(第152図11、13)などが出土している。またP1から鉄製品<中>N-15刀子(第152図12)、P3から土製品<中>P-9(第152図15)、周溝内から比較的扁平な土師器<中>C-3坏(第152図1)が出上している。その他堆積土中から土師器<中>C-33坏(第152図3)、須恵器<中>E-78高台付坏(第152図6)、土製品<中>P-10不明品(第152図10)、鉄製品<中>N-24不明品(第152図14)などが出土している。

SD931溝跡、SB997建物跡に切られている。



第151図 SI947 出土遺物 (1)



国際 番号	年号 番号	種別	器形	出土箇点	法長 (cm)	外面測定	内面測定	備考	調査 次数	写真 回数
SI947 (1)		木製品	板材	SB947	P2	貝 S227 厚 5.18~3.2			65	
SI947 (2)		中石	十脚器	环	SB947・壁付	壁付+口付 11.4 壁厚 9.2	口部部・体部ミカナテ、先端ハラケズリ	ヘラミガキ 黒色施塗	A 8.3	65
2	中石 8	上脚器	环	SB947	床面	貝 S234 厚 10.87 壁厚 9.8	口邊部・体部ミカナテ、底部ハラケズリ	ヘラミガキ 黑色施塗	A 8.3	65
3	中石 9	十脚器	环	SB947	壁付	貝 S238 口付 10.2 壁厚 9.2	白端部ミカナテ、体部・底部小凹	ヘラミガキ 黑色施塗	A 8.3	65
4	中石 10	十脚器	环	SB947	床面	貝 S235 口付 10.2 壁厚 9.8	口端部・壁部ミカナテ、底部ハラケズリ	不明	1.1a	
5	中石 17	脚芯器	环	SB947	床面	貝 S233 口付 14.0 壁厚 2.2	口端部・壁部ミカナテ・ハラケズリ	ロクロナダ	1.1	65
6	中石 18	脚芯器	柱状	SB947	床面	貝 S232 口付 15.4 壁厚 6.6	口端部・壁部ミカナテ・ハラケズリ	ロクロナダ	1.1	65
7	中石 27	脚芯器	直角	SB947	床面	貝 S234 口付 13.0 壁厚 6.6	つま先部ミカナテ、底部ハラケズリ	ロクロナダ	65	
8	中石 28	脚芯器	直角	SB947	床面	貝 S235 口付 15.4	ロクロナダ	ロクロナダ	1.2a	65
9	中石 29	脚芯器	直角	SB947	床面	貝 S236 口付 16.3	底部ロクロナダ、天井部凹版・ハラケズリ	ロクロナダ	1.2	65
10	中石 30	十脚品	不明	SB947	壁付	貝 S231 壁厚 4.6	体部ハラケズリ、底部滑面	滑面	65	
11	中石 31	全葉器	不明	SB947	床面	貝 S235 厚 9.0~9.75	底部ハラケズリ	滑面	65	
12	中石 35	全葉器	万子	SB947	P1	貝 S236 壁厚 1.0~1.2	底部ハラケズリ	滑面	65	
13	中石 37	全葉器	不明	SB947	床下	長さ 2.8以上 厚 0.7~1.1			65	
14	中石 38	全葉器	不明	SB947		貝 S114 厚 1.5			65	
15	中石 9	全葉器	不明	SB947	P2	貝 S131 厚 4.0~5.5	ハラケズリ		65	

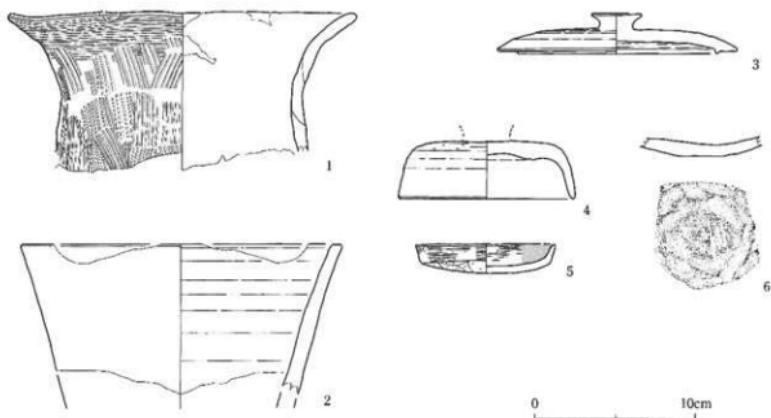
第152図 国 SI947 出土遺物 (2)

SI948堅穴住居跡 (第65次・第150、155回)

東西6.1m、南北5.15m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN—E—Wである。壁は垂直に立ち上がり、高さ20~25cm残存している。床面は灰黒褐色粘土質シルトと黒褐色粘土による貼床で、P1の西側に80×135cmの範囲で、高さ6cmのマウンド状の高まりがある。床面上で10個のビットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が主柱穴と考えられた。

カマドは北壁中に天井部やソデが崩壊した痕跡のみを検出した。これらを撤去した床面上で83×45cmの不整形で、深さ5cm程のビットを検出した。

周溝は北壁の一部と東壁に認められ、幅14~25cm、深さ3~6cmで、断面形はU字形である。周溝内よりビッ



回数 番号	器種 番号	種別	断面形状	出土地點 附位	証量 (cm)	外側調査	内面調査	参考	測定 次元	考文 問題
1	平C-37 上部蓋	蓋	SI948	床面	残存高8.75 口徑1.6	口縁部ノカゲ、底部ハテメ	口縁部・体部不明	A 1	65	
2	中E-37 底付蓋	蓋	SI948	P1	残存高10.2 口徑20.0	口縁部・体部小明	口縁部・体部ノカゲ	1	65	
3	中K-9 須恵器	蓋	SI948	P1	残高25 口徑14.9	縦溝・つまむけ付、口縁部ノカゲ	口縁部ノカゲ	12b	65	
4	中L-9 須恵器	蓋	SI948	蓋4片	残存高13.3 口徑10.3	須恵器ノカゲ、天井部横輪ヘラケズリ	ロクロナガ	B 2	65	
5	中C-4 土師器	壺	SI948	堆積土	器高28.11口径5.6 底径5.0	口縁部ノカゲ、底部ノカゲ	ハラミガキ、單色處理	A B 3	65	
6	中C-8 土師器	壺	SI948	堆積土	器高21.2 底径3.0	底部ヘラケズリ、底部本無釉	ハラミガキ、單色處理		65	

第153図 SI948 出土遺物

トを6箇所で検出した。

遺物は住居跡床面からハケメ調整の顯著な土師器<中>C-37蓋(第153図1)、堆積土中からはきわめて小型の土師器<中>C-4壺(第153図5)、底部に木葉痕の残るC-89壺(第153図6)、掘り方埋土中からは器高が高い須恵器<中>E-79蓋(第153図4)、P1からカエリがありきわめて扁平な須恵器<中>E-9蓋(第153図3)、口縁部がラッパ状に開くE-81壺(第153図2)が出土している。

SI954・955竪穴住居跡を切っている。

SI954竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西7.3m以上、南北5.9m以上の方形か長方形と推定され、東壁の方向はN-4°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、高さは残存状況の良好な箇所で20cm程である。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床である。床面上で2個のピットを検出したが、そのうち規模や形態、配置からP1が柱穴と考えられた。

周溝は幅21~30cm、深さ10~11cmで、断面形はU字形である。北壁の西半で途切れている。

遺物は住居跡床面から脚部に窓を有する土師器<中>C-18高壺(第154図2)、基部がL字に折れ曲がった鉄製品<中>N-9鎌(第154図3)、堆積土中からはハケメ調整の土師器<中>C-94壺(第154図5)、P2からは両面黒色処理され、小振りの土師器<中>C-15壺(第154図1)、天井部に櫛描き状の沈線が多数入る須恵器<中>E-82蓋(第154図4)が出土している。

SI955竪穴住居跡を切り、SI948竪穴住居跡に切られている。

SI955竪穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.56m、南北5.7mの隅丸方形で、南北軸の方向はN-0°-Eである。壁は緩やかに立ち上がり、高さは5~20cm残存している。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床で、張替えを伴う造り替えがあると考えられる。



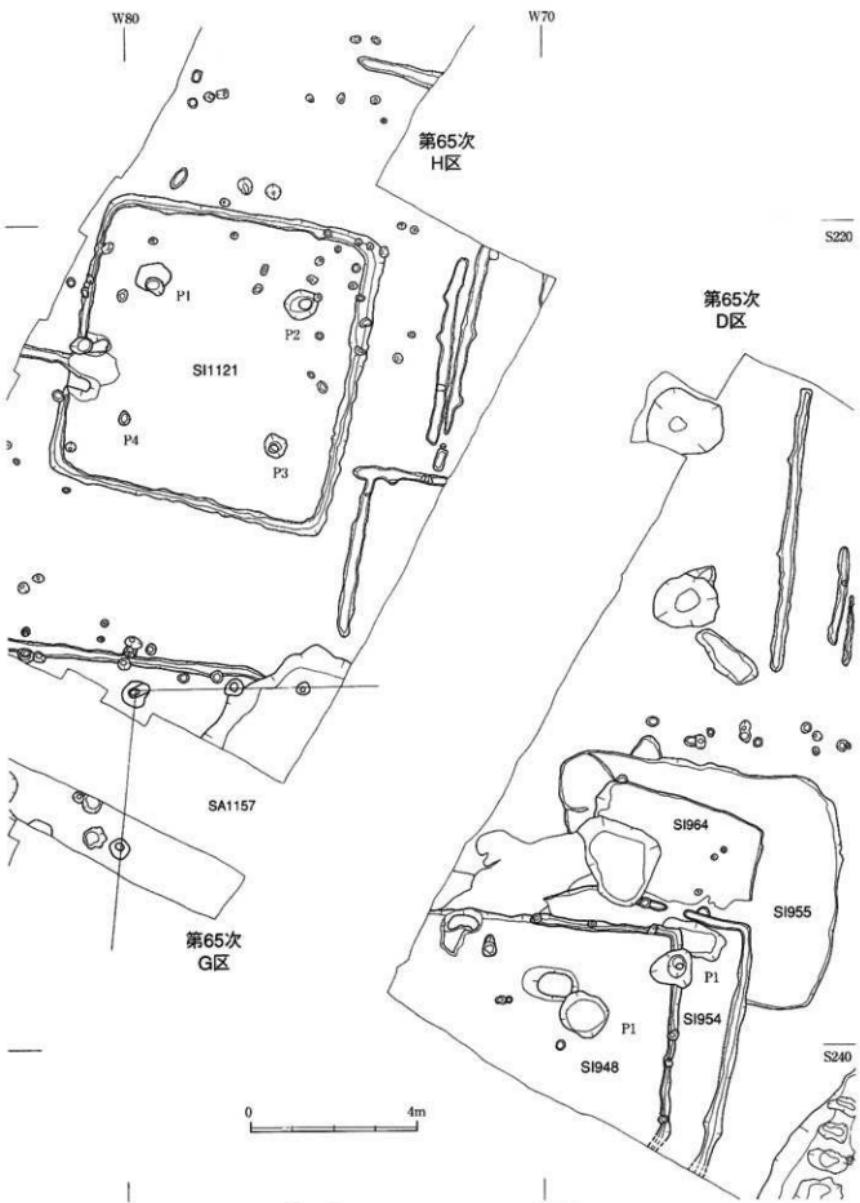
遺物 番号	形状 番号	種類	器形	出土場所	法長 (cm)	外側調査	内面調査	備考	西高 東低	西高 東低
1 HIC-15	土師器	环	筒状	西土造地 層位	器高5.8 口径8.6 底径8.7	口縁コナデ、底部・側面ラテツリ突出部 LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	LJ縫合部→底部へラミガタ、黒色施用	A II 1b	65	65
2 HIC-16	土師器	环	筒状	床南 層位	器高10.0 LJ径11.3 底径10.1	LJ縫合部コナデ、外観、断面凹凸なし、黒色施用	LJ縫合部コナデ、外観、断面凹凸なし、黒色施用	I	65	65
3 HIC-17	土師器	环	筒状	床西 層位	長5.143				65	65
4 HIC-42	土師器	环	筒状	西土造 層位	径合33.0 口径27.0	輪唇コナデ、丸太脚付ヘラクツリ・輪唇足跡 ロクロナデ	ロクロナデ	B II	65	65
5 HIC-94	土師器	环	筒状	床北上 層位	径合25.7 LJ径23.6	LJ縫合部コナデ、体部ハケメ	LJ縫合部コナデ、体部ハナデ	A I 1b	65	65
6 HIC-35	土師器	环	筒状	西行40 層位	径合17.4	輪唇ハラナデ	輪唇部一部ヘラクツリ	II	65	65
7 HIC-31	土師器	环	筒状	床南下 層位	器高10.8 口径20.0	LN底ハラメコナデ、底・底面ハメヘラクツリ LJ縫合部ハメコナデ、底面・底部ヘラクツリ	LJ縫合部ハメコナデ、底面・底部ヘラクツリ	III	65	65

第154図 SI954・955 出土遺物

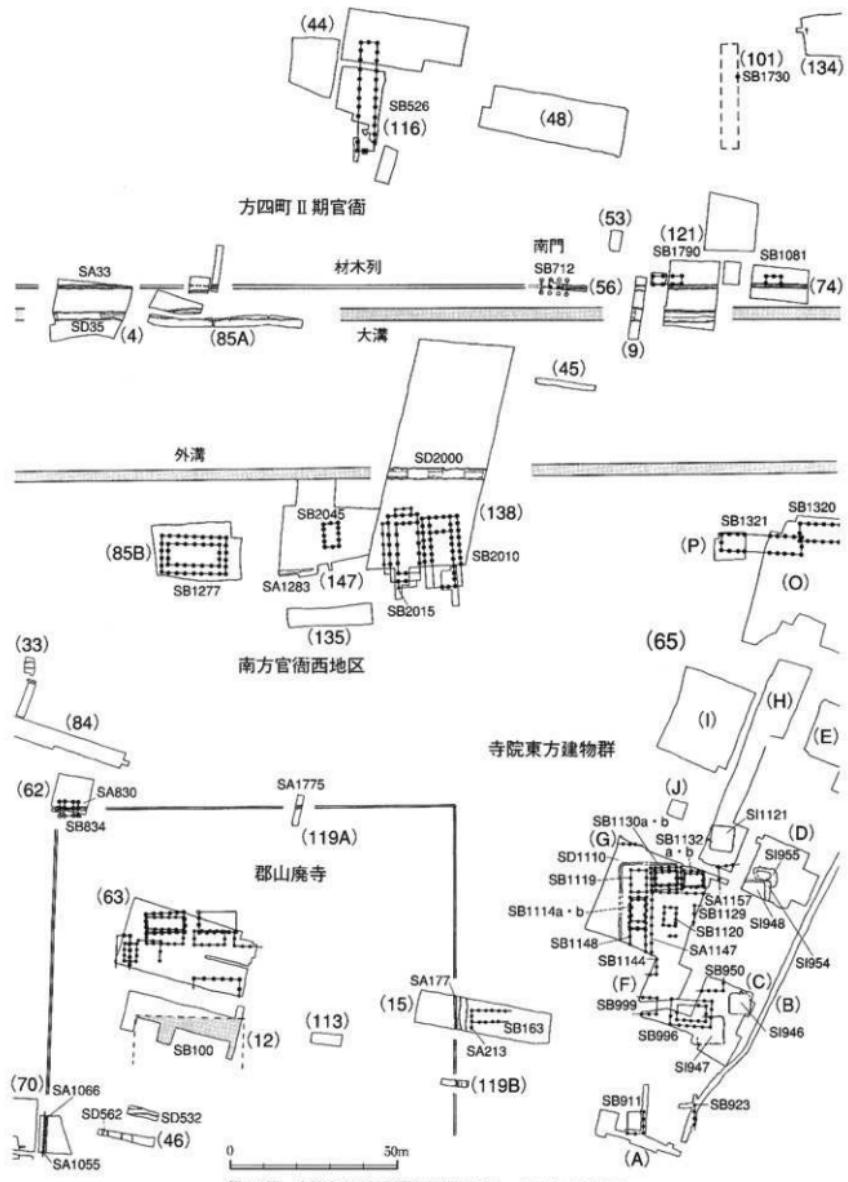
カマドは北壁やや西よりにあり、55×75cmの範囲が深さ13cm程度で舌状に北に延びている。周辺の床面上に焼土やソデなどの痕跡が全くないことから、住居の使用された最終段階より以前の旧カマドと考えられる。

遺物は堆積土中から半球形の土師器<中>C-20甌(第154図7)、掘り方埋土中から窓の付いていた痕跡を留める土師器<中>C-35高环脚部片(第154图6)が出上している。

SI954・964堅穴住居跡に切られている。



第155図 SI948・954・955・1121 平面図



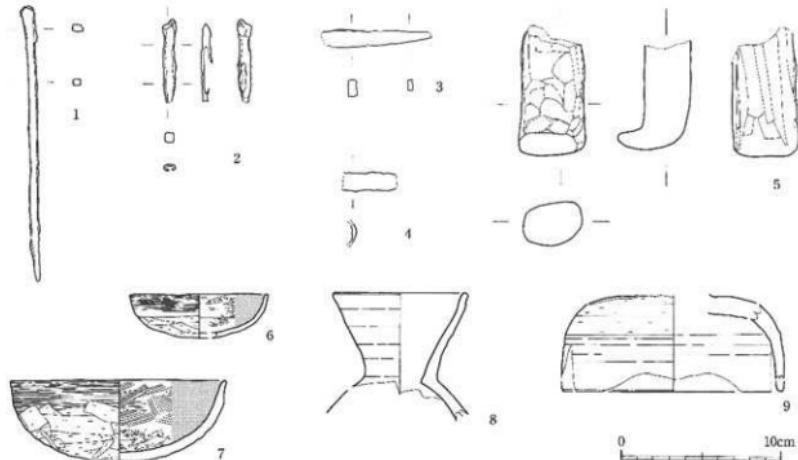
第156図 寺院東方建物群周辺造構配置図 () 内は調査次数

SI1121堅穴住居跡（第65次・第150、155図）

東西6.8m、南北7.5mの隅丸方形で、東壁の方向はN-5°-Sである。壁は垂直気味に立ち上がり、高さは30~40cm残存している。床面は灰黄褐色粘土質シルト、褐灰色シルト質粘土による貼床で、カマドの周辺には灰、炭化物、焼土が堆積している箇所がある。床面上で4個のピットを検出し、規模や形態、配置から主柱穴と考えられた。またP1の西側には90×100cmの範囲で、高さ5cmの範囲でマウンド状の高まりがある。

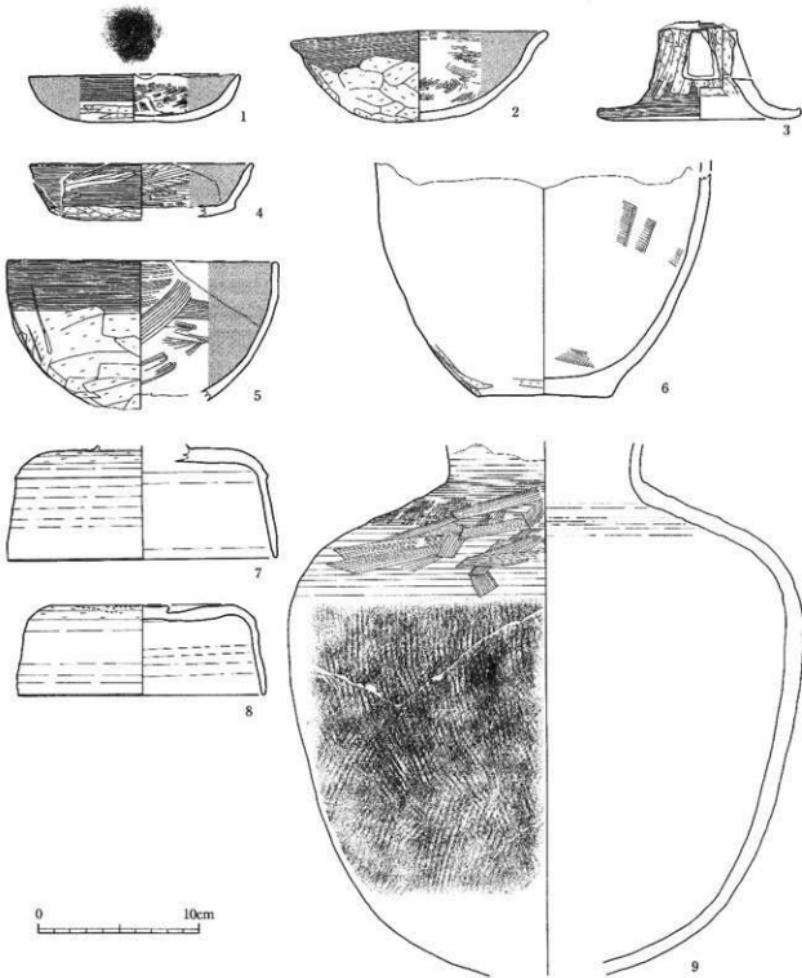
カマドは西壁やや南よりに位置し、灰黄褐色、にぼい黄褐色粘土質シルトなどで貼床をした後に構築されている。焚口と燃焼部、煙道が検出された。両ソデの先端幅は80cm、奥行きは90cmで、底面には60×40cm、深さ5cm程度のピットがある。このピット上の天井部には直径10~20cmの碟が環状に配されている。

遺物は住居跡床面から口縁部がラッパ状に開く土師器<中>C-63壺(第158図2)、内面に「×」の線刻のある土師器<中>C-64壺(第158図1)、大型で鉢状の<中>C-65壺(第158図5)、平底風の<中>C-67壺(第158図4)、カエリがなく大型の須恵器<中>E-49・51蓋(第158図8、7)、丸底のE-50甌(第158図9)、鉄製品<中>N-4刀子片、N-69不明品、N-3鉄鏃(第157図3、4、1)、K-3紡錘車が出土している。なおカマド内から体部下半のみの土師器<中>C-61甌(第158図6)、両ソデの構築土中から脚部に窓を有する土師器<中>C-60高壺(第158図3)、馬溝内から鉄製品<中>N-7不明品(第157図2)が出土している。その他堆積土中から小振りな土師器<中>C-66壺(第157図6)、半球形で内面黒色処理された<中>C-12壺(第157図7)、カエリがなく大型で扁平なツマミを有する須恵器<中>E-52蓋(第157図9)、口縁部のみの<中>E-4甌(第157図8)などが出土している。このうち土師器<中>C-12壺と須恵器<中>E-4甌は内面に漆が付着している。なお床面上のピット中から脚の可能性のある土製品<中>P-18(第157図5)が出土している。



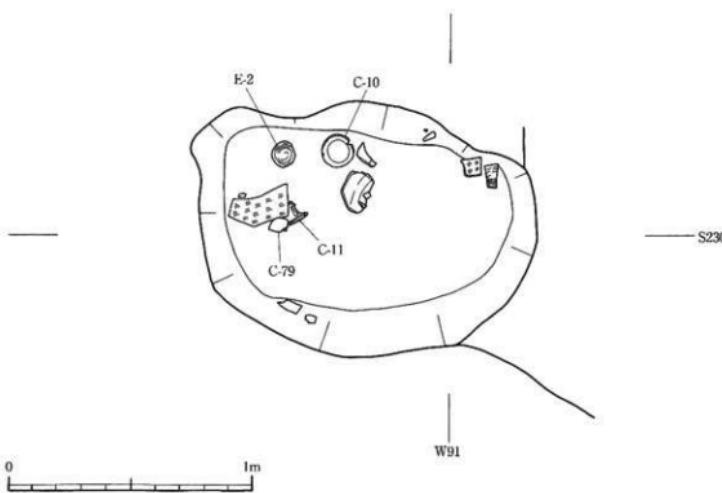
図版番号	種類 番号	種別	器形	出土場所	法面(cm)	外面観察	内面測定	備考	調査 次数		写真 回数
1	小N-3	金銀製品	鉄鏃	床面	長さ17.1 厚さ0.5				65		
2	小N-7	金銀製品	不明	SI1121	12 長さ3.2 厚さ0.7 厚さ0.6				65		
3	中Y-4	金銀製品	刀子	SI1121	底面 長さ6.9 幅1.1 厚さ0.6				65		
4	中Y-6	金銀製品	不明	SI1121	底面 長さ3.4 幅1.1 厚さ0.3				65		
5	中Y-15	土師器	脚少	SI1121	P 高さ8.0 幅3.7 厚さ2.7	(A) 脚面→ヘラケズリ (B) ヘラケズリ			65		
6	中C-66	土師器	甌	SI1121	底面上 高さ2.7 LH#855	口縁部・体部コロナギ、底面ヘラケズリ ヘラケズリ、黑色処理			65		
7	中C-12	土師器	甌	SI1121	底面上 高さ5.02 LH#134	口縁部コロナギ、体部・底面ヘラケズリ ヘラケズリ、黑色処理			65		
8	中H-4	土師器	甌	SI1121	底面上 残高8.1 LH#883	口縁部コロナギ			65		
9	中E-32	土師器	蓋	SI1121	底面上 残高6.0 LH#135	縫合部コロナギ、天井部縫合ヘラケズリ コロナギ			65		

第157図 SI1121 出土遺物 (1)



回収 番号	登錄 番号	種別	巻番	出土地點	法量 (cm)	外観調査	内観調査	備考	測定 次数	写真 枚数
1	HC-64	上部器	环	SH1121 床面	直径29 リブ径13.1 高径11.4	UJ縫合・各部ヨコナギ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	I×, A/B2b	65	
2	HC-65	下部器	环	SH1121 床面	直径56 リブ径15.9 高径2.6	口縫合ヨコナギ、底部・茎部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	A/B2a	65	
3	HC-66	上部器	环	SH1121 南袖	残存高6.2 高径12.5	脚付部ヘラケズリ、脚部ヨコナギ	茎部ヘラケズリ、耳部茎ヘラミガキ→黑色化星	I	65	
4	HC-67	上部器	环	SH1121 床面	直径35 リブ径13.7 高径11.6	UJ縫合・各部ヨコナギ→ヨコナギ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	A/B3	65	
5	HC-68	下部器	环	SH1121 床面	残存高9.2 口径16.8 高径7.0	口縫合ヨコナギ、底部・茎部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	A/B2a	60	
6	HC-69	上部器	壳	SH1121 キヤフ	残存高12.8 成形径4	体側下へラケズリ、底部木裏痕	ヘラナダ		65	
7	HC-70	瓶底器	壳	SH1121 床面	残存高7.1 口径16.8	底部ヨコナギ、底部・脚部ヘラケズリ	リカロナダ	B3	65	
8	HC-71	底部器	壳	SH1121 床面	残存高5.5 UJ径13.4	底面・つまみ基ヨコナギ、足部周縁ヘラケズリ	リカロナダ	B3	65	
9	HC-72	瓶底器	壳	SH1121 床面	残存高33.1 高径 9.0	瓶底・瓶身ヨコナギヘラナダ、瓶身ヨコナギ	脚部・体部上半ヨコナダ		65	

第158図 SH1121 出土遺物 (2)



第159図 SK1128 平面図

SK1128土坑（第65次・第150、159図）

東西140cm、南北104cmの不整形で、深さは19cm、壁は緩やかではあるが直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色粘土質シルトで、焼土粒を含んでいる。

遺物は堆積土中から体部に段があり、口縁部にかけて丸みを持って外傾する土器器<中>C-10壺(第160図2)、脚部が中実の<中>C-79高壺(第160図3)、脚部に縦長の大きな窓のある<中>C-11高壺(第160図4)、体部中に稜を有する須恵器<中>E-2壺(第160図1)や須恵器甕片が出土している。

SB1130建物跡N1E1柱穴を切っている。



第160図 SK1128 出土遺物

回収番号	登錄番号	種別	器形	出土場所	法尺(cm)	外面調査	内部調査	備考	調査回数
1	PF-E-2	須恵器	壺	SK1128	深さ15.0	口縁部・底部コナド、底面斜面ヘラケズリ	ロクロナヅ	I2	65
2	PF-C-10	土器器	壺	SK1128	深さ4.4. 口径12.5. 底径10.9	口縁部コナド、底面斜面ヘラケズリ	ヘラミボキ、黑色光澤	AII2	65
3	PF-C-79	土器器	高壺	SK1128	残存高6.3. 窓径9.4	窓部コナド、底面ココナドヘラケズリ	黒褐色コナドヘラケズリ、底面ヘリカタモード色光澤	II1	65
4	PF-C-11	土器器	高壺	SK1128	残存高8.8. 窓径13.6	窓部コナド、底面ココナドヘラケズリ	底面ヘラケズリ、底部ヘリカタモード色光澤	1	65

第3節 郡山廃寺

遺跡南部に位置し、材木列により東西120~125m、南北167mの区画された中にある。その区画内の中央、西よりにSB100基壇建物跡があり、規模や瓦の出土量、周辺の遺構配置から講堂跡と考えられた(註17)。この建物跡の北側にはSB890建物跡などの掘立柱建物跡が「匁」形に配置され、僧房として使われていたものと見られている(註18)。また講堂の南側にはSD562・532溝跡で区画された一画があり、瓦の出土量の多さから溝で囲まれた内部に瓦葺き建物の存在が推定されている。この東の巨石が出土したと伝承のある地点は、区画のはば中心となっており、塔跡の推定地と考えられている(註19)。これらの遺構を取り囲むSA830・1850材木列上の2箇所で門が発見されている。以下主要な遺構についてふれることにする。

SB100基壇建物跡 (第12次・第164図)

東西32m以上、南北12m以上の基壇版築を検出した。搅乱が著しく、版築の広がりを調査区断面や最下層土の分布などから推定した。方向は基壇北端の推定範囲で、E-2°-Sと見られる。版築が最も良好に残存している部分では、厚さ2~3cmのシルトや粘土の層が18~20枚重なり、高さが50cm程度となっている。基壇北部に東西4m、南北22~23mの範囲が周囲の底面より、18cm程度深くなっている。

基壇上部は削平を受け、礎石や根固め石などは検出されなかった。

SB214建物跡に切られている。

SB890建物跡 (第63次・第164図)

桁行5間、総長11.8m(柱間寸法220~245cm)、梁行3間、総長5.8m(柱間寸法195~205cm)の東西棟の建物跡で、桁行の方向はN-1°-Wである。柱穴は一辺60~130cmの隅丸長方形で、深さは55cm程度、柱痕跡は直径15~20cmである。各柱穴の掘り方は長辺を揃えて掘り込まれている。

柱穴掘り方理土より底部が手持ちヘラケズリされた須恵器E-276环(第161図)が出土している。

SK851土坑 (第63次・第164図)

平面形が250×330cmの不整隅丸方形を呈する、深さ20cm程度の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。この土坑から三彩I-51蓋(第162図)が出土した。いわゆる奈良三彩の小壺の蓋である。I-51蓋はくすんだ緑色と光沢のある褐色の釉が観察される。また器面に茶褐色の付着物も見られるが釉かどうかは明らかでない。蓋の径は4.7cm、紐を含めた高さが1.5cmである。胎土は乳白色を呈し緻密である。

SD532溝跡 (第46次・第164、166図)

上幅140~160cm、下幅15~40cm、深さ50~90cm程度で、ほぼ真東西方向に延びる溝跡である。壁は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で傾斜を有し緩やかに広がる。

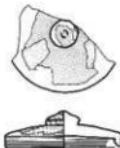
遺物は遺構の検出面と堆積土中から、多量の瓦が出土した。検出面上から粘土板巻き作りによるF-30丸瓦(写真図版708)、凹面に布目痕が残り、周縁にのみヘラケズリが施され、凸面に繩叩きの後、ナデにより叩きの痕跡を擦り消したG-23平瓦(写真図版708)、割部の破片で内面に格子状の叩き口が残るH-9鷹尾片が出土している。この他に堆積土中から、多量の瓦、土師器、須恵器片が出土している。

SD562溝跡 (第46、66次・第164、166図)

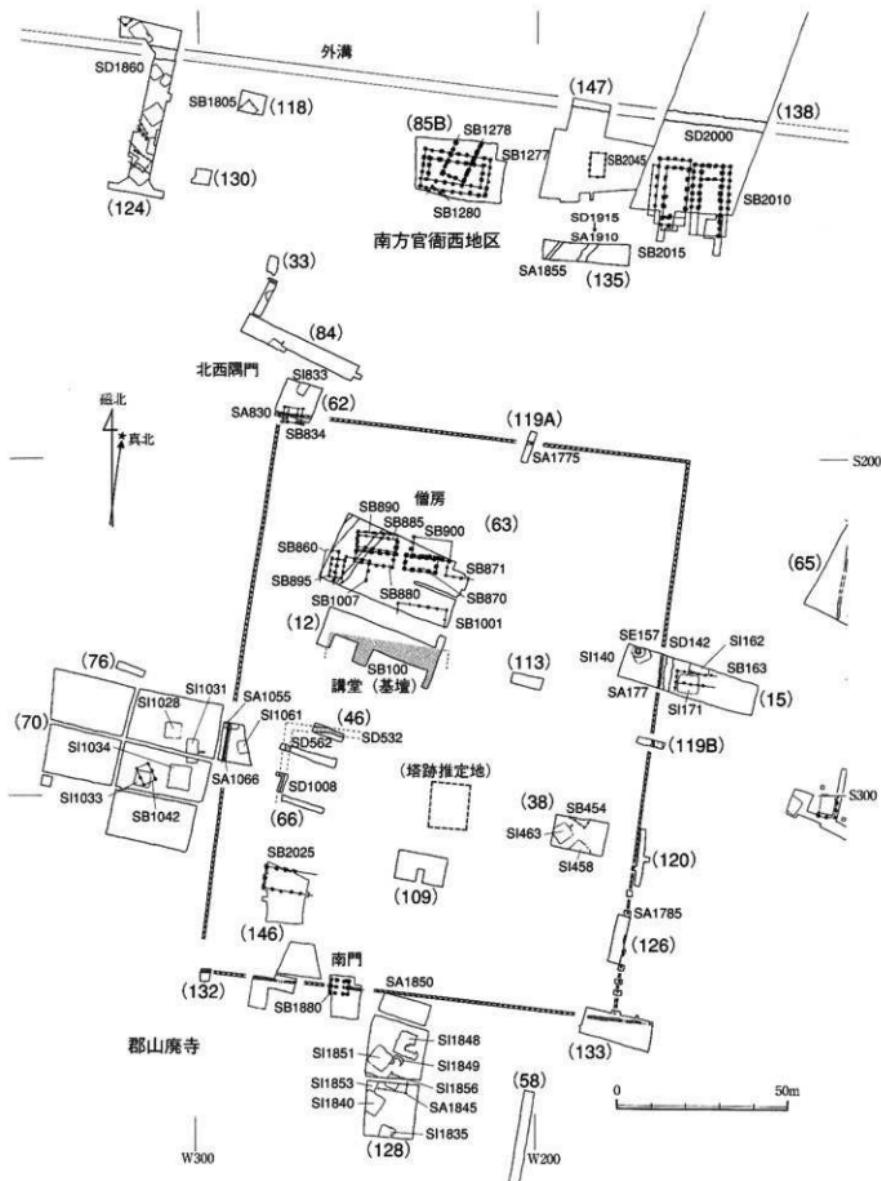
上幅130~210cm、下幅16~40cm、深さ70~120cm程度で、N-6°-E方向に延びる溝跡である。壁は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で傾斜を有し緩やかに広がるか、V字形を呈している。検出された位置と断面形、遺物の出土状況から、第66次調査のSD1008溝跡に連続していると考えられる(註20)。またこの溝跡は、北側で東に



第161図 SB890 出土遺物

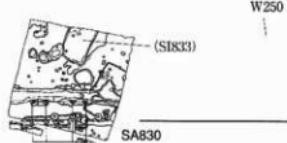


第162図 SK851 出土遺物



第163図 郡山庵寺遺構配置図 () 内は調査次数

第62次



W250

S200

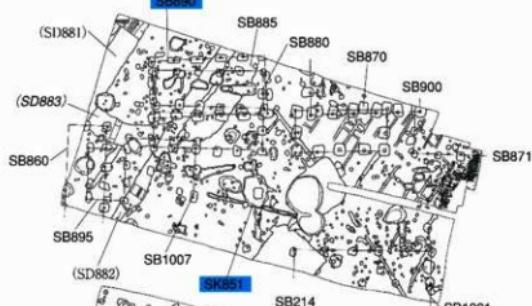
第25次

S250

第70次

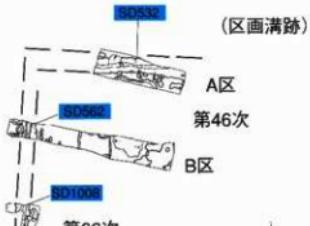


第63次



講堂(基壇)

第12次



第66次

第164図 郡山庵寺北部 1

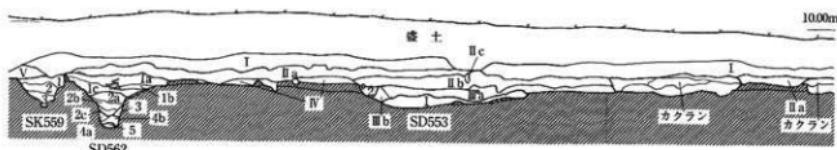
W250

屈曲するものと推定される。

遺物は検出面と堆積土中から、多量の瓦が出土した。堆積土1層中からは、八弁で直径4.6cmの中房の中に5個(1+4)の蓮子が配されたF-32軒丸瓦(第167図3)や、同じ文様のF-31・33軒丸瓦(第167図2、4)、凹面に布目痕と摸痕が残り、凸面に繩叩きの後、一部ナデにより叩きの痕跡を擦り消したG-24平瓦(第167図5)、凸面に4条ないし5条の撚引き波状文の施されたG-26平瓦(第167図7)が出土している。この他にH-13・14鷲尾、G-27平瓦、土器部壺、甕片、須恵器片が出土している。

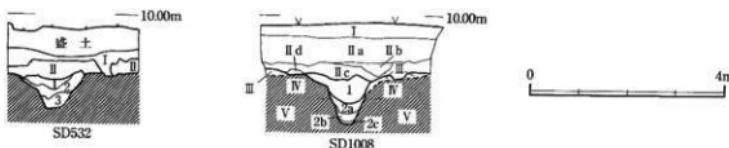
第66次調査区からも同種の軒丸瓦、平瓦、丸瓦が出土している。そのうちG-43・44・60平瓦(第168図12、第167図6、第168図3)は、凸面に朱が付着しており軒平瓦の代用で葺かれたことが考えられる。また丸瓦の中に軒丸瓦の一部で、瓦当が付いていた可能性のあるものがある。

第46次調査区Bトレンチ南壁

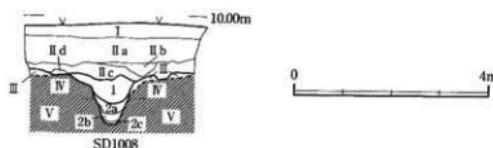


部位	土色	土性	備考	部位	上色	土性	備考
基本層I	I 10YR4/2 黄褐色	シルト	表土	SD562	Ia 25Y4/4 嫩青色	シルト	瓦片を多く含む
Ia	I 10YR3/2 棕褐色	シルト		Ib 10YR4/2 黄褐色	シルト		
Ib	I 10YR3/2 棕褐色	シルト		Ic 25Y4/1 黄褐色	シルト		
Ic	I 25YR5/2 嫩褐色	シルト		2a 10YR3/4 黄褐色	シルト		
Iia	10YR3/3 嫩褐色	シルト	瓦を含む	2b 10YR3/3 嫩褐色	シルト質粘土		
Iib	10YR3/4 に赤い黄褐色	シルト		2c 10YR3/4 嫩褐色	シルト質粘土		
Ii	5Y5/1 棕オーブ色	シルト		3 10YR4/4 嫩褐色	シルト質粘土		
V	5Y4/1 黄色	シルト		4a 10YR3/1 黄褐色	シルト質粘土		
SD553				4b 25Y4/1 黄褐色	シルト質粘土		
1	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト		5 25Y4/4 オリーブ褐色	砂		
2	25Y4/1 黄褐色	シルト		SK569			
				I 25Y4/1 黄褐色	シルト		
				2 25Y4/1 黄褐色	シルト		
				3 5Y4/1 黄色	砂+シルト		

第46次調査区Aトレンチ西壁



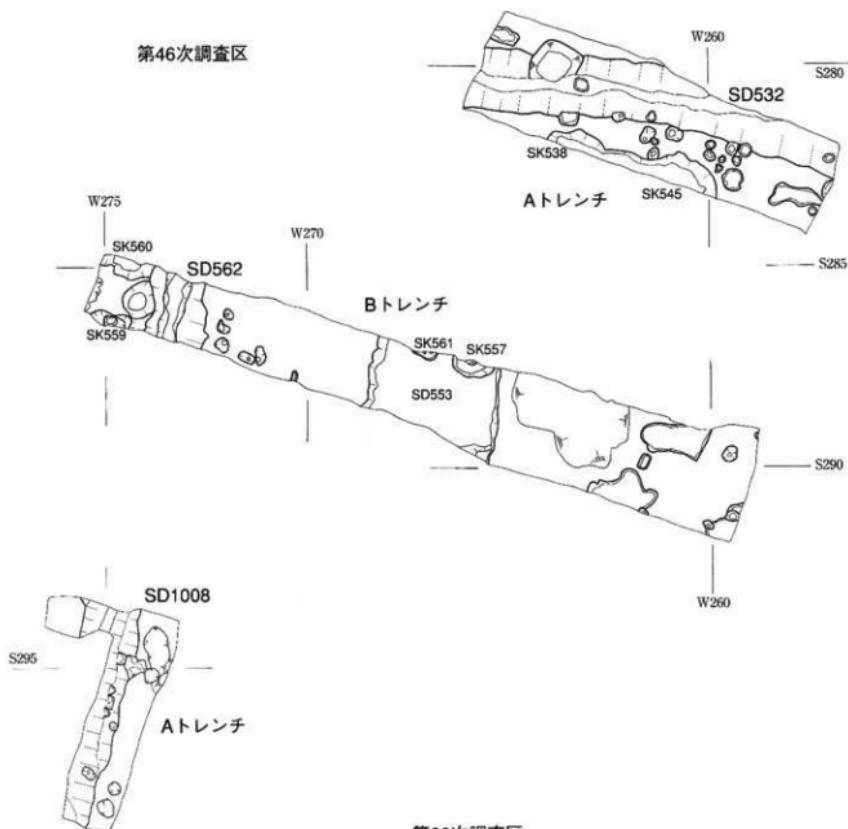
第66次調査区Aトレンチ南壁



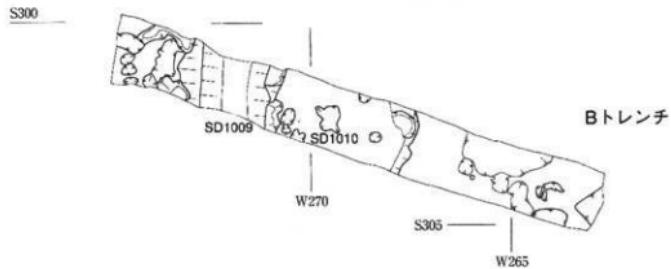
直標名	部位	土色	土性	備考	直標名	部位	土色	土性	備考
第46次調査区Aトレンチ西壁									
基本層II	I	10YR3/3 嫩褐色	シルト	耕作土	SD1008	I	5Y 黄色	砂	盛土
	II	10YR3/3 嫩褐色	シルト	瓦を含む		Ia	10YR3/3 嫩褐色	シルト	ゴミ多量に混入
SD532	I	10YR2/3 黑褐色	シルト			Ib	10YR3/3 嫩褐色	シルト	しまりなし
	II	10YR2/3 黑褐色	シルト			Ic	10YR3/4 嫩褐色	シルト	耕作土
	III	10YR3/3 嫩褐色	シルト			Id	10YR3/4 嫩褐色	シルト	黄褐色シルト混入
						II	10YR6-6 黄褐色	シルト	暗褐色シルト混入、地山断形層
						IV	10YR6-8 明褐色	シルト	地山
						V	10YR7/4 に赤い黄褐色	粘土	地山
SD562	I	10YR3/3 嫩褐色	シルト			I	10YR3/4 嫩褐色	シルト	礫化鉄、マンガン粒含む
	II	10YR3/2 黑褐色	シルト			2a	10YR3/2 黑褐色	シルト	に赤い黄褐色シルトを若干含む
	III	10YR3/2 黑褐色	シルト			2b	10YR3/2 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルトを若干含む
						2c	10YR3/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	

第165図 SD532・562・1008 断面図

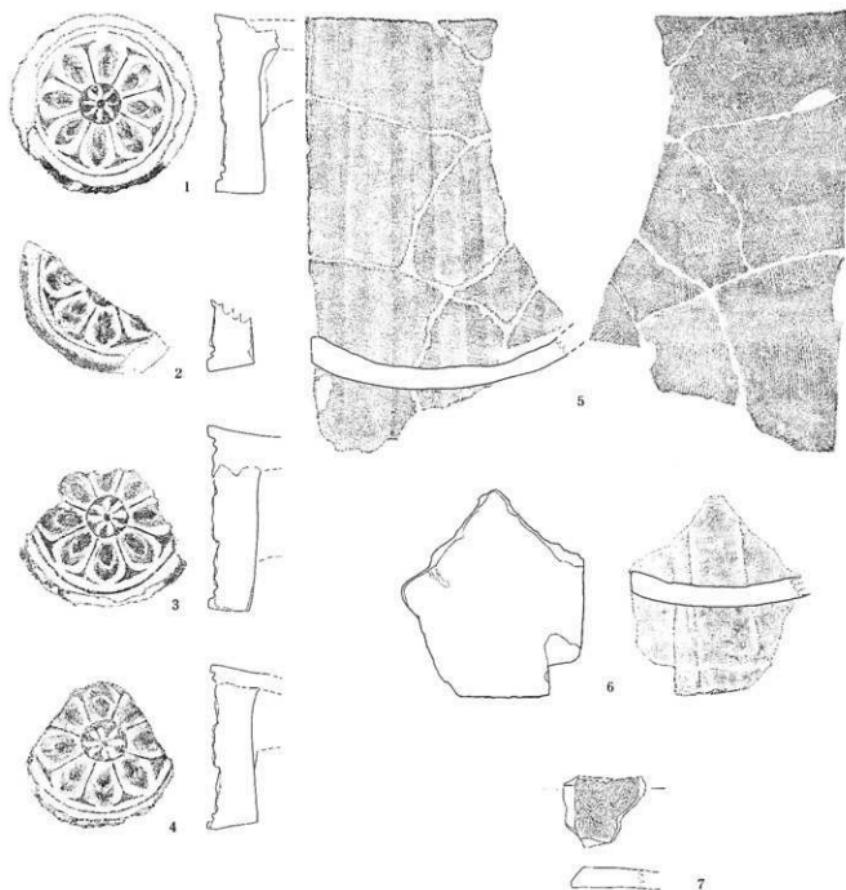
第46次調査区



第66次調査区



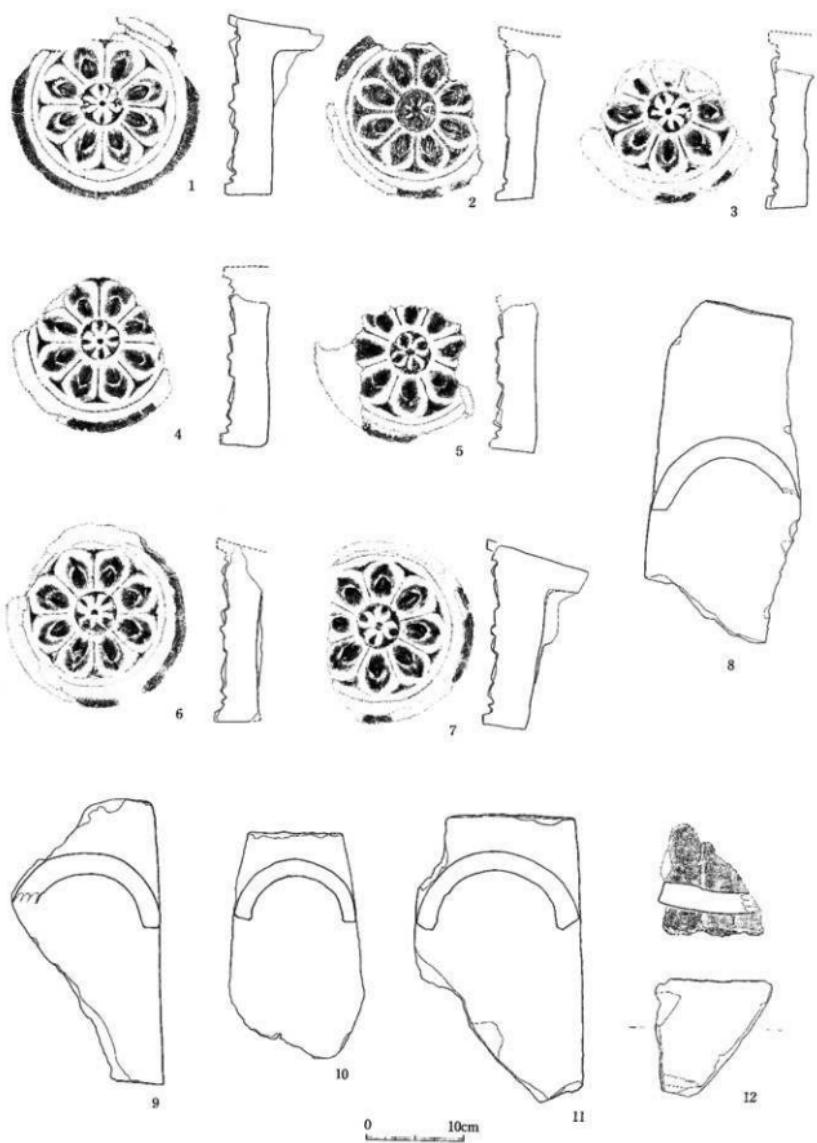
第166図 SD532・562・1008 平面図



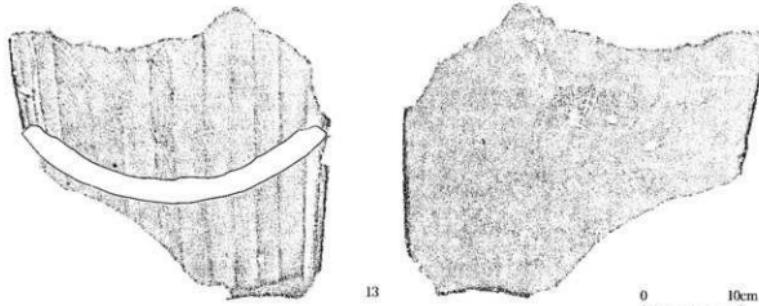
0 10cm

出土地 番号	文様 番号	種別	形状	出土地表		法量 (cm)	外面調整	内面調査	備考	削合 次数	写真 枚数
				南十進面	南十進裏						
1 F-34	瓦	单瓦	SD562	直径18.2	中房底4.2	厚3.49	单刃通草文	瓦当侧面ケズリ、瓦当裏面ケズリ→ナゲ	46	707	
2 F-31	瓦	单瓦	SD562	直径7.5	房舍底		单刃通草文	瓦当侧面ケズリ、瓦当裏面ケズリ→ナゲ	46	707	
3 F-32	瓦	单瓦	SD562	直径18.7	中房底4.6	厚3.33	单刃通草文	瓦当侧面ケズリ、瓦当裏面ケズリ	46	707	
1 F-33	瓦	单瓦	SD562	直径14.8	中房底4.2	厚3.49	单刃通草文	瓦当侧面・瓦当裏面ケズリ→ナゲ	46	707	
5 G-24	瓦	平瓦	SD562	幅25.0	厚3.23		凸面・側切き口→ナゲ	四面・布目板、余切り裏、捲荷板	46	707	
6 G-44	瓦	平瓦	SD1008	2 篦16.2	厚3.22		凸面・側切き口→ナゲ、朱付裏	四面・布目板、捲荷板	66	728	
7 G-26	瓦	平瓦	SD562	幅7.2	篠8.3	厚3.20	凸面・側切き口→ナゲ・波状比縫	四面・布目板、余切り裏	46		

第167図 SD562・1008 出土遺物



第168図 SD1008 出土遺物 (1)



第169図 SD1008 出土遺物(2)

SB834建物跡 (第62次・第164図)

桁行3間、総長5.5m(柱間寸法130~140・270cm)、梁行は2間と推定され、総長4.3m(柱間寸法205~224cm)の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺45~84cmの不整形で、深さは約30cm、柱痕跡は直径15~20cmである。SA830材木列の一部を抜き取って建てられ、棟通りはSA830材木列と一致している。各柱穴は抜き取り穴を伴い、北の桁行柱穴のみ2箇所つまとめて抜かれている。

SI835堅穴住居跡、SK832土坑を切り、SD828溝跡に切られている。

SA1066材木列一郡山廃寺西辺(第70次・第164、171図)

直径12~20cmの丸材をN-4°-Eの方向に密接に立て並べている。掘り方は上輪68~70cm、深さは20~30cmである。底面は平坦で壁は直立している。北の第62次調査で、この材木列が鍵形に曲りSB834建物跡(門跡)に接続している。

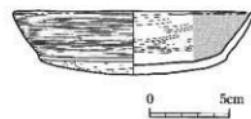
西側に35~40cm離れ、SA1055一本柱列が平行している。

遺物は掘り方理土中より、内面ヘラミガキ黒色処理され平底風の土師器C-635杯(第170図1)が出土した。

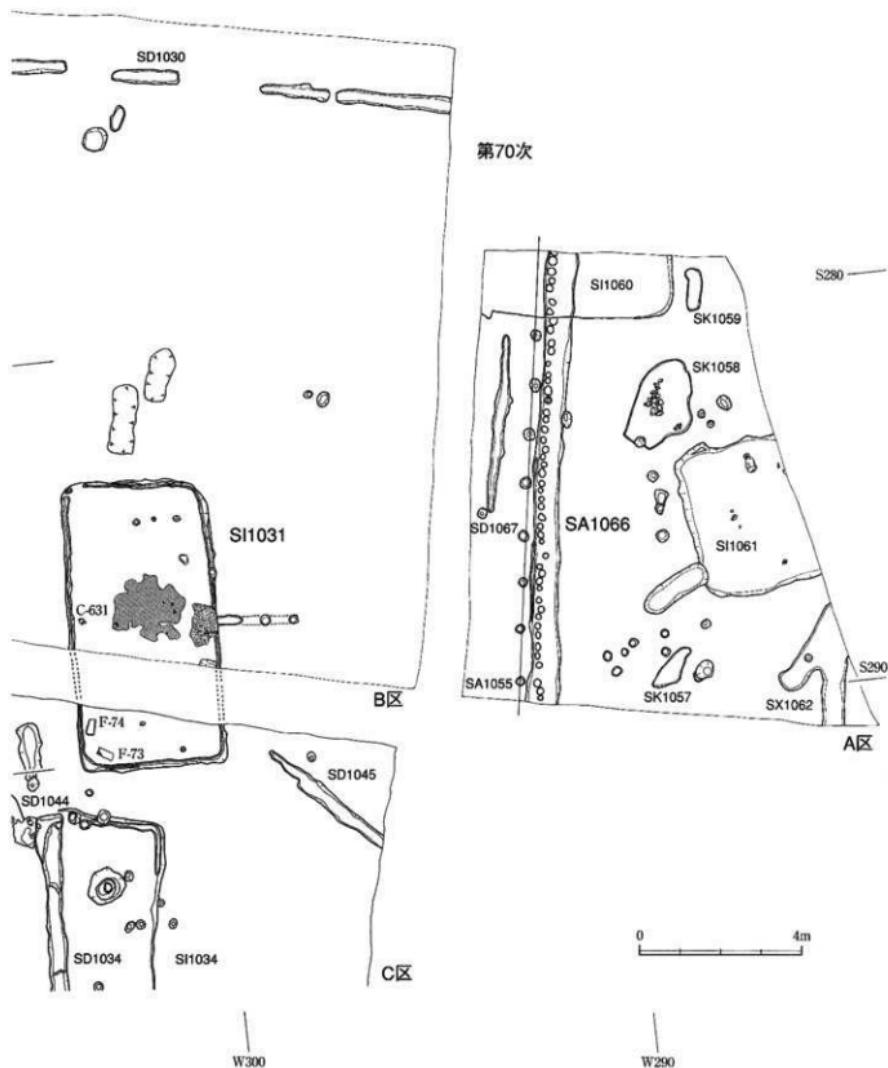
SI1060堅穴住居跡に切られている。

SI1031堅穴住居跡 (第70次・第164、171図)

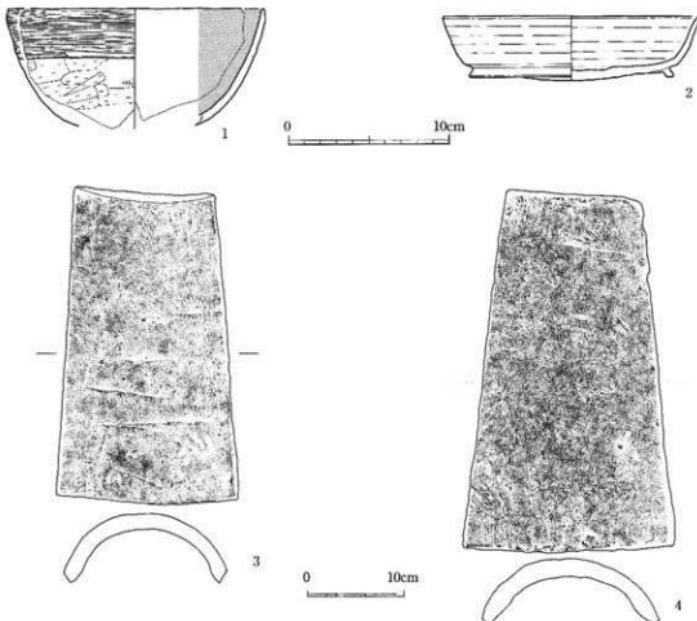
東西3.6m、南北6.95mの長方形で、方向はN-4°-Wである。北半は床面上まで搅乱が及んでいるが、南半では壁の高さは20cmまで残存している。床面は全面に貼床が見られ、カマドの前面の住居中央において炭化物の集積が見られる。カマドは東壁の中央にあり、削平が著しいが燃焼部底面と煙道がからうして残存している。煙道は



第170図 SA1066 出土遺物



第171図 第70次調査区 SI1031、SA1066 平面図（都山庵寺西部）



図版 番号	種類 番号	種別	器形	出土場所	法長(cm)	外面調査	内面調査	参考	測定 次数	写真 番号
1	C-631	土師器	鉢	SI1031 室内	底面直径7.5cm 高さ15.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ナデ→ヘラミガキ→黒色処理	八百2a	70	731
2	E-289	須恵器	高台付壺	SI1031	器高4.1cm 口径6.1cm 底径12.5cm	口縁部ヨコナデ、底面内側ヘラケズリ	ロクロナデ	八百2	70	731
3	F-73	丸瓦	丸瓦	SI1031 室内	厚さ1.8cm	内面調査	河原布目瓦	八百2	70	731
4	F-74	丸瓦	丸瓦	SI1031 室内	厚さ1.8cm	内面調査	河原布目瓦	八百2	70	731

第172図 SI1031 出土遺物

長さ200cm、幅22cm、深さ2cmで、先端に直径20cm、煙道底面よりさらに3cm程深いピットがある。壁際には幅7~20cm、床面からの深さが6~8cmの周溝が巡っている。

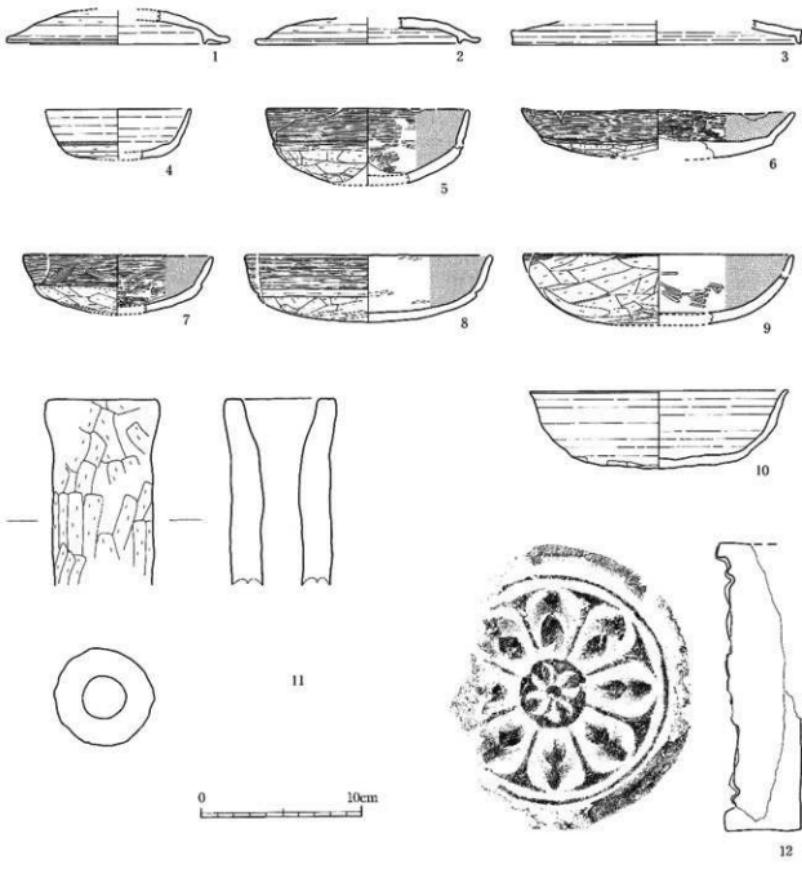
遺物は床面より丸底で内面黒色処理された土師器C-631壺(第172図1)、全長が31.6cmと36.6cmの丸瓦F-73・74(第172図3、4)が出土し、堆積土中より底部が高台より下がった須恵器E-289高台付壺(第172図2)、E-290高壙片や黒小瓦2点などが出土している。

SI143堅穴住居跡(第15次・第176図)

南北5.5m、東西6mのやや歪んだ隅丸方形で、壁は緩やかに立ち上がり、壁高が15~26cm残存している。壁に沿って幅22~38cm程の周溝が巡っている。床面はほぼ全面に貼床が認められ、北壁中央にカマドが付設されている。周辺の床面上からは多量の焼土が検出されている。

柱穴と見られるピットが床面上の4箇所から検出された。掘り方は直径70~90cmの円形、深さは80cm程で、柱痕跡は直径20cm程である。

カマドは燃焼部が幅70cm、奥行40cmで、奥壁より長さ170cm、幅30cm、深さ10cmの煙道が延びている。煙道部の先端は直径30cm、深さ10cmのピット状を呈している。燃焼部中央から煙道の方向はN-6°-Wである。焚き



第173図 SI143 出土遺物(1)